

R18
ADULT ONLY



聖品希石

エスフェール

Holy Crystals
Esphère

Noyaux
Inséré

聖晶希石エスフェール Noyaux insérés

○登場人物

阿古屋結乃

御珠学園高等部二年生。女子水泳部。

誰に対しても優しく親切な優等生。

栗色の長髪と真珠のように大ぶりで愛嬌ある瞳、女性らしく豊満な肢体の持ち主。

幼い頃、引っ越してきた御珠市の今の家で晶と出会ったものの、当初はいじめられているものと思って嫌っていたが、溺れているところを助けられたことから勘違いだと気づき、晶に想いを抱くようになると同時に、彼のように、自分を省みずに他人を助けられる人間になりたいと憧れるようになる。老若男女誰に対しても優しく正義感の強い性格は晶に対する憧れからくるもの。

晶に対して恋心を抱いているが、今の関係性が壊れてしまうのを恐れてずっと告白できずにいる。

希晶石に選ばれ、エスフェールに変身して幻魔と戦う。属性は空間。

◇播磨晶

御珠学園高等部二年生。

結乃とは幼馴染で同級生。

御珠市の主社である玻璃磨神社の家系であり、ちょっとだけ靈感がある。

不器用でやや不真面目な部分はあるものの、根は優しい正義漢。

結乃に対して恋心を抱いているが、今の関係性が壊れてしまうのを恐れてずっと告白できずにいた。

◆クォルツ

上位幻魔。

幻魔を生み出し続けてきた元凶。

自身が生み出していた幻魔が倒され続けてきたことに業を煮やし、自らエスフェールを倒そうとして出陣。それまでの幻魔とは桁違いの強さでエスフェールを圧倒するも、晶の乱入により、晶への想いを再確認した結乃が真の力を発揮したことで敗北。浄化されたはずだが……？



聖晶希石エスフェール これまでのあらすじ

御珠学園高等部に通う少女、阿古屋結乃は、不思議な力を持つ宝石、希晶石の担い手として選ばれ、聖晶希石エスフェールとして歪んだ欲望によって異形化した怪物——幻魔と戦い続けていた。ある日、それまでにない強大な力を持つ上位幻魔クオルツと対峙したエスフェールは苦境に立たされるも、小さな頃から慕い続けてきた幼馴染である播磨晶の乱入により形成を逆転し、クオルツの浄化に成功する。戦いを終えた結乃は、晶に対する自らの想いを再確認したのだった。

——好きだ。結乃……俺と、付き合ってくれ。

真剣な瞳が結乃を真っ直ぐに見据えていた。

結乃にとって、晶はずっと恋い焦がれ続けてきた相手だったものの、晶からの対応はあくまで幼馴染を相手にするものだった。

だから結乃は放課後、晶に家に呼ばれたときも、特に何かを期待することはなかった。どうせ宿題を写させてほしいのだ、そういった頼みごとだろうと思っていたのだ。

眩すぎる光に照らされた直後のように、晶の言葉の意味を理解するまでに時間を要した。

理解して、次はその言葉の意味の理解が間違っていないかという不安に襲われた。合っているかどうか聞き返すのは怖かった。強力な幻魔に立ち向かうことよりもずっと怖かった。

頭の中で何十回、何百回と検算を繰り返し、間違いようがないと結論づける。

そこまできてようやく、結乃の胸の中に温かな幸福感が満ちた。

結乃はこれまで、良い両親に、良い友人、その他にも良い人々に恵まれて何不自由なく生きてきた。

たくさんの幸福な経験があった。

希晶石に選ばれ、エスフェールとして幻魔と戦うという過酷な運命に晒されることこそあったものの、それを差し引いたところで幸福な人生であることは間違いない。

そんな、幸福に満たされた十余年の人生の中にあって、一番の幸福だと迷うことなく断言できるほどに、結乃は幸せだった。

幼い頃から待ち望み、焦がれ、夢にまで見たことだった。

だからこそ——結乃は、酔っていたのかも知れない。
幸福という名の媚酒に。

「……私も、あつくんのこと、ずっと好きだったよ……」

答えた直後、晶の顔が結乃の目と鼻の先にまで近づいていた。

え、と声を漏らす間もなく、結乃は抱き寄せられていた。

際立って鍛えているわけではないものの、自分や同性のような柔らかさとは違う、硬く、厚い胸板。二の腕にうっすらと浮かぶ筋肉。その感触が全身に伝わってくる。

幾度となく、想像したことはあった。しかし現実には、肌で感じる、晶が男なのだということを実感する。その感触を、これまで感じられなかった分も感じようとするように、結乃の手が晶の背中に回され、抱擁を返す。気持ちを確認められたからなのか、鼻腔をくすぐる晶の匂いは、いつもとどこか違う気がした。

唇に、感触。

それが晶の唇の感触だと気付いてから、結乃は目を閉じた。

触れ合った胸と胸から、ドクン、ドクンと鼓動が伝わってくる。

晶もドキドキしているのだと思うと、少しだけ落ち着けて、その倍以上に昂ぶりが増した。

触れ合う場所を通じて、晶の身体から、結乃へと熱が伝わってくる。あまりに幸せにすぎて、夢を見ているのではないかと思ってしまう。

唇を重ね合わせたまま、五秒が経ち、十秒が経ち、その時間の経過が、結乃は嫌ではなかった。

不意に、重ねたままの結乃の唇に、濡れたモノが触れた。

晶の舌だった。

ただ唇を触れ合わせるよりも濃厚な、いやらしいキスがあることは、結乃も知っていた。具体的にどのような動きをするのかまでは知らないとはいえ、それが愛情を交わし合うための行為だということとはわかる。

大胆だ、とは思ったものの、嫌だとは微塵も思わなかった。それどころか、結乃を満たしていたのは幸福感だった。自分に対して、そうしたいと思ってくれているということが、結乃にとって何よりも嬉しかった。

ずっと、ずっと、結乃は晶に恋していた。

実際に恋人同士になったのは五分も経たない前からであっても、結乃が晶のことを愛していたのはもう十年以上も前からなのだ。

共に過ごした時間ならば、そこらの熱烈な恋人同士よりも、よほどに長いのだから。

重ね合わせた唇に触れてきた舌先を、結乃は受け入れるように口元を緩める。

唾液を纏った舌先が、結乃の口内へと挿入^{はい}ってくる。

熱く、滑りを帯びた蛇のような感触。それが晶の想いだと思えば、嫌なものではなかった。どうするのが正しいのかはわからないが、ほとんど無意識に、結乃は挿入^{はい}ってきた舌に自らの舌を絡めていた。

口内の粘膜よりも敏感な舌の感覚器が、晶を感じとる。

硬さに、熱、そして、不思議と蜜のような甘さを感じる唾液の味。じゅるり、と。晶の口元から、下品な音が漏れた。

晶の舌が結乃の唾液を舐めとり、啜った音だった。

恥ずかしい、と思うと同時に、結乃は昂ぶりを感じていた。じゅるるっ、と。お返しのよう、晶の唾液を吸る。

ただでさえ幸福に茹だった結乃の身体は、一瞬で沸騰した。

昔、父親が飲んでいたウイスキーの味を知りたくて、ほんのわずかに飲んだときのような酩酊の感覚が一番近かった。それまで考えていたことが吹き飛んで、くらくらとしてくる。ただでさえバクバクと鼓動していた心臓は、内側から破裂してしまいそうだった。

晶から伝わってきたはずの熱は、いつの間にか結乃の方から晶へと流れ込む熱へと変わっていた。

身体が、熱い。

特に熱を持っているのは下腹の奥。自慰をするときにも熱を持つ、子宮の位置だった。

「んっ……ちゅっ……」

貪欲に舌を絡め、唾液を吸る。触れ合った唇の隙間から、卑猥な粘音が漏れる。

いやらしい行為だという自覚はある。いやらしい女だと思われないという思いもある。しかし、止められない。ずっとずっと、自分の中で抑えてきた欲求が、堰を切ったように晶を求めめる。

最近また窮屈になってきたブラの中で先端がピンと硬くなり、ブラの裏地に擦れるのがわかる。ショーツには、結乃の内側から滲み出した蜜が潤と染み込んでいた。

（ん……濡れて、きちゃった……）

晶が抱擁を強める。より強く感じられる晶の肉体に、結乃もまた、自らの身体を押しつける。制服に閉じ込められた豊富な胸元が、晶

の胸板に当たってぐにゅりと変形する。硬くなった先端が擦れ、甘い疼きが胸の先から全身へと電気のように流れるのを、結乃は否定しない。

「んあ……♥」

結びついたままの唇と舌の隙間から、甘い声が漏れた。

それが恥ずかしくて、恥ずかしさを紛らわそうと、舌をより情熱的に絡める。

「んっ……ちゅっ……はあ……♥」

はじめてのキスだというのに、情熱的な——情熱的すぎるほどのキスだった。

晶を想って自らを慰めることはしよっちゅうだったが、それらとは比にもならない官能。

胸や秘所といった性感帯を直接刺激しているわけでもないのに、底抜けにいやらしい気持ちかわき上がる。

（すごく……しあわせ……）

貪るような口づけがどれほど続いただろうか。

どちらからともなく、唇が離れる。二人のものが混じり合った唾液が、名残惜しむように粘性の糸を引いて伸び——切れた。

それは互いの存在を感じ合うことに満足したがゆえの離別というよりも、さらに強く感じるため、次のステップへ移るための動きだった。

火照った身体が酸素を求め、口と鼻とを両方使って、荒く酸素を吸入する。鼻腔を抜ける晶の体臭は、興奮ゆえかオスの匂いを増していた。自分に対して向けられる劣情も、相手が晶であるならば心

地良くすらある。結乃の身体は、晶をより強く欲して、疼く。

「あつくん……」

(抱いて、ほしい……)

告白されたばかりで、そんなことを思うのははしたないというの
はわかっている。

だから言い出せない。だけど、身体は正直だった。

晶の身体に抱きつき、その体温と、匂いとを堪能しているだけで、
結乃の身体は熱を持ち、湿り気を帯びていく。

「結乃……」

晶も、結乃の気持ちに伝えてくれた。

言葉だけでなく、態度でも示してくれた。

抱きしめられた腕の力強さと、伝わる鼓動の速さが、晶の気持ち
を伝えてくれている。

結乃は幸福だった。ずっと好きだった幼馴染に、自分の気持ちを
受け入れてもらえたのだ。

これ以上の幸福があるとは思えなかった。

だが——結乃の幸福は、まだ終わらなかった。

晶の指が、結乃の太ももに触れた。

「んっ……♡」

熱を帯びた肌は結乃自身が思っている以上に敏感で、それだけで
結乃の口から艶っぽい声が漏れた。

「あっ……くん……♡」

「結乃……俺は、お前が欲しい……告白したばかりでがつついてる
と思われるかもしれないけど……」

恥ずかしがるようにして告げられたその言葉で、晶もまた自分と
同じことを思っていたのだとわかると、それ以上、自分を理性で縛
ることは結乃にはできなかった。

「私も同じ気持ちだよ。えっちな女だって思われたくないけど、あ
つくんのことが欲しい。だから——」

結乃は晶に、もう一度自らの唇を重ねた。

先ほどまでの、貪り合うようなディープキスではなく、互いの意
思を確かめあうための口づけ。五秒にも満たない触れあいで、二人
の気持ちは通じあった。

*

「結乃、射精すぞっ！」

「うん……あつくん、キてっ……！」

晶の言葉に、結乃は迷わずそのすべてを受け入れることを決めた。

どれほど真剣に愛し合っているようにとも、まだ学生。

もしデキてしまった場合、それを受け入れる覚悟こそあるし、そ
れもまた幸せだろうと思いはするものの、まだ早い。

本当ならば、少しでもその危険性を下げるために膣外そとに射精だして

もらうべきだということはわかっている。しかし、ずっと焦がれ続
けてきた最愛の男性ひとと初めて繋がっているのだ。その愛の塊を自分
の外に吐き出させるのは嫌だった。

そのため、希晶石の力で避妊処理をするつもりだった。自分のた
めに希晶石の力を使わないよう自分を律していた結乃だが、このとき

ばかりはその力を使っても許されるだろう、と。

晶がそれまでで一番強く、腰を打ちつけた。衝撃はすべて官能へと変換されて、結乃は簡単に絶頂に達した。

白む視界の中、これまでの抽送の中で最も深い場所にまで達したまま、晶はさらに腰をぐいと押しつける。びくびく、と深く届いた肉棒が、これ以上は堪えられないとも言わんばかりに痙攣し、

「あっ、あっくんの、クるっ……♡」
びゆるっ、びゆるるるっ！

最愛の存在の精が、膣に、子宮に注がれる。

そうすることで、刻まれたかった。自分は彼の所有物なのだ。

射精が続く。普通ならば一瞬のはずの時間が、何十倍にも、何百倍にも引き伸ばして感じられた。

絶頂の最中にあつた意識がさらに大きく跳ね飛ばされる。

体験したこともない強烈な絶頂感に意識を吹き飛ばされそうになりながら、結乃は晶を抱き締めた。次第に収まっていく肉棒の脈動と、触れ合った胸元から伝わってくる心臓の鼓動は同じなことに気付いて、少し嬉しくなった。

ぬるま湯に浸かっているような浮遊感。甘い絶頂の余韻から、ゆっくりと意識が浮かび上がっていく。

「はあ……あ……すご、かったあ……♡ エッチって……こんなに、気持ちいいんだ……あっくんも……気持ち、よかった？」

「ああ……最高の気分だよ」

晶がゆっくりと腰を引いていく。

とびきりの絶頂を迎えたばかりの膣は敏感で、引き抜かれていく

摩擦で膣壁を引っ搔かれるだけでもビクッ、と小さな絶頂を連続させる。

まだまだ晶を感じていたくて、膣口が名残惜しむように晶の力に首に絡む。それでも引かれる腰に、晶の怒張が、きゅぽっ、と情けない音を立てて抜ける。

「んあっ……♡」
たっぷりと注がれた愛の証が、そのあまりの量ゆえにドロリと溢れた。

(あっくん、こんなにいっぱい射精してくれたんだ……)

その事実が嬉しくて、胸がいっぱいになる。

そのときだった。

背筋を、強烈な悪寒が駆け上がった。熱された身体の中、背骨だけを氷柱に置き換えられたような感覚。

愛する人に、愛の証を注いでもらったはずなのに。

自分は今、世界で一番幸せなはずなのに。

直後、結乃の視界は白一色に染まった。

「ん、ああああああっ♡」

先ほどまでの行為の中で達した、人生一番の絶頂をたやすく飛び越える、暴力的なほどの快感だった。

それまでに上げたどんな声よりも甘く蕩けた嬌声が、抑えようもなく喉を抜けていく。

(なに、こ、れっ……!?)

何が起こったのか、わからなかった。

お腹が、熱い。

注がれた直後よりもなお熱く、グツグツと、子宮が煮え立つ錯覚すらあった。

ドクン、ドクン、ドクン、と。

下腹部に生まれた熱が、全身に拡がり、循環する。それは熱源である子宮だけに留まらず、あつという間に全身へと伝播していく。

背筋に走る極大の寒気とは裏腹に、身体の火照りが止まらない。

そのあまりにも異様な感覚が、夢心地だった結乃の目を覚ました。

「結乃？」

突如苦悶の声を上げた結乃を心配するように、晶が覗き込む。

その反応が何故だか——驚くほどに白々しく思えた。

晶が浮かべているのは、疑いようもなく結乃を慮る表情。それは間違いないというのに。

ふと頭に浮かんでくるのは、小さな、今の今まで、疑問とすら思わなかった小さな疑問。

晶と舌を絡めあってから、ずっと感じていた疼き。

結乃にとって、異性と愛を交わすのははじめてのことだった。ずっと恋をし、焦がれ続けてきた相手とのはじめての行為なのだから、身体が火照り、淫らな気分が湧き上がるのはそういうものなのだと思っていた。

しかし、本当にそんなことがあるのだろうか。

(ま、さか……っ！)

結乃は知っている。

この強烈な、暴力的なまでの疼きを。理性も何もかもを蕩かし尽くし、快楽を求める獣へと変えてしまうそれが何なのかを。

ありえないと思った。思いたかった。

だけど一度違和感を抱いてしまえば、再度酔いなおすことなどできなかつた。

すべてから目を背けて、この幸福に酔い続けてしまいたい。

そんな欲求を噛み殺して、結乃は晶を突き飛ばした。

「結乃……？ 急にどうしたんだ？」

戸惑ったように首を傾げる晶のことが、結乃にはもう晶には見えなかつた。

冷静になって考えれば、不自然なことではないか。

晶は確かに元々、ややスケベな気質はあるが、誠実な人間だといふことは誰よりも結乃が知っている。それが告白した直後に性行為に至るなんてことがありえたのだろうか。

晶は結乃がエスフェールとしての力を使えることなど知るわけがない。そんな晶が、いくら結乃の同意を取るのだとしても、避妊もせずに、まして膈内に精を放とうなどとするだろうか。

幸福感に酔って気付かなかつた違和感の歯車が、次々と噛み合っていく。

「あつくん……じゃ、ない……あなた、誰っ!？」

つい今まで自分と繋がっていた最愛の男性——そう思っていた何者かを、結乃は鋭い視線で睨みつける。

腹の底から湧き上がる淫熱は収まるどころか、心臓が鼓動するたびに膨らんで、今この瞬間にも結乃を内側から焦がしている。誰であつても構わない。もう一度自分の淫らに蕩けた牝穴を滅茶苦茶にしてほしい。そんな、普段ならば考えられないような考えさえ浮か

んでくるのを、結乃は意志力で捻じ伏せる。

その瞳に浮かぶ意思が鈍らないことを確認したのか、にい、と。

晶が——否、晶の姿をしたナニカが、嗤った。

顔の造作は、先ほどまでと、本物の晶と変わらない。

偽物であると確信している今この段に至ってさえ、結乃にも違いがわからないほどに完璧な造作だった。

だからこそその違和感。

(あつくんは、あんな顔、しない……)

邪悪。

それが浮かべた笑みを一言で表すならば、そうとしか表現のしようがなかった。

「カッティングアップ・エスフェール！」

一息で言祝ことほがれた変身の起句に、右手中指に嵌めた真珠の指輪が輝きを放つ。

生まれた光は一瞬で結乃の身体を包み込み、乱れた制服を光へと還元し、戦うための戦衣装へと変換する。

胎の奥から感じるのは、今まで気付かなかったのが不思議なくらいの濃密な幻魔の瘴気。

もはや間違いなかった。

いかに知識がなかりと、結乃が冷静でさえいれば、それが不自然であることに気付くことはできただろう。だが、結乃は冷静ではなかった。人生至上最高の幸福に酔っていた。

「ここまでくれば流石に気付くか。あるいは、ここまで気付かなかったというべきか」

晶の姿をしたナニカが紡いだ声は、やはり寸分違わず晶のものだった。だが、違う。短い言葉の中にも、粘りつくような悪意を感じる。

「この世界には、恋は盲目という言葉があるんだったな。その恋心がお前の瞳を曇らせてくれた。おかげで想像以上にうまくいった」

「あなたは……誰なの……？」

「わからないか？」

口調自体は冷静そのもの。しかしその言葉の端々に押し込められた餓狼のような激情に、結乃は思い当たった。

「あなた……この間の幻魔——確か、クォルツ！」

「随分と気付くのが遅かったじゃないか。それほど、この男に抱かれたかったのか？」

(気付ける要素はあったのに、私は浮かれて、違和感を見逃しちやった……)

クォルツの擲掄に、結乃は奥歯を噛み締めた。

晶ではなかった。

その事実は、結乃に深い絶望をもたらしていた。

晶ではない男に犯されたから、というだけではない。もちろんそれもあるが、それ以上に、手に入れたと思っていた幸福が、偽りだったこと。

なによりも幸せに思った告白そのものが嘘であったという事実が、結乃の心を軋ませる。

何故浄化したはずのクォルツがここにいるのかはわからない。

だがそれ以上に、結乃には知らなければならなかった。

心の軋みを必死に耐えて、結乃はクオルツを睨みつける。

「本物のあつくんはどこ!?」

最悪の可能性が頭に浮かび、消し去ろうとしても消えてくれない。もし、本当にそうだとしたら、と考えただけで足が竦む。

「安心しろ。播磨晶は無事だ。ちゃんとここにいます」

自らの胸を指し示しながら、晶は——否、クオルツは告げる。

その言葉の意味を結乃は理解する。

そもそもの話。誰よりも晶を見つけてきた結乃が、どれほど精巧であろうと晶と偽物の区別がつかないはずがない。

つまり、晶はそこにいます。

目の前の、クオルツの中に。

今まで結乃が戦ってきた幻魔は、人に魔晶が寄生したことで、その欲望が肥大化して生まれたものだった。元々持ち合わせていた優しさなどの感情が、歪んだ欲望によって塗り潰されて、別人のように性格が変わることはあっても、その根底にある人格は寄生された宿主のものでしかない。

しかし、目の前にいるのは晶が持つ歪んだ欲望が生み出した怪物などではない。クオルツという幻魔の人格が、晶の肉体を乗っ取っているとは思えない。

幻魔の持つ能力は千差万別。今まで出会ったことこそなかったものの、そういった能力を持つ幻魔がいたところで何も不思議ではない。それが固有の能力なのか、それとも本人が自称する上位幻魔ゆえの特性なのかはわからないし、今はそんなことどうでもよかった。

(あつくんを助け出す……絶対に、絶対に……)

これまでエスフェールとして戦ってきて、結乃は助ける相手が誰だろうと、手を抜いたことは一度もない。

それでも、晶は結乃にとって誰よりも、何よりも大事な存在だった。

結乃の想いに希晶石が応える。

凄絶なほどに強烈な光が生まれ、結乃の手の中に収束し、太陽よりも眩い薄桃色の光剣を形作る。それはクオルツとの戦いの最後に生み出した光をも上回る、想いの刃。

今のクオルツから感じる力は、あのとときと比べて遙かに弱い。

確実に倒せる。

確信の元に、息を吸い込み、振るおうとする、直前。

「やめとけ、結乃」

クオルツの静かな言葉がそれを遮った。

そんな静止を聞く必要は結乃にはないはずだった。しかし、晶とまったく同じその声音に、光剣を握る腕が止まる。

「確かにお前ならばオレを浄化することは可能だろう。力も戻っていない今オレでは、それに抗うことはできまい。今度こそ完全に消滅させられるだろう」

命乞いにしては強気な語調に、結乃は眉をひそめた。

その言葉がまるで、本当に結乃に忠告するもののように聞こえたから。

「重ねて言おう。やめておけ、と。今、オレという存在とこの男の——播磨晶の精神は深く繋がっている。オレを無理に浄化しようとするれば、この男の精神も道連れとなるぞ」

「そんなっ……」

もちろん、クオルツが嘘を言っている可能性はある。人を誑かし、墮落させる幻魔を信用できるはずがない。

しかし、それが事実である可能性を考えてしまったら、それだけで結乃にはもう、何もできなかつた。

「お前に浄化されかけて、辛くも逃げ延びたオレには、他人に寄生するだけの力すらも残っていなかった。あのときはオレも消滅を覚悟した。事実、あとほんの数秒遅れれば、自然と消滅していたことだろう。だが、神はオレに味方した」

クオルツは、晶の顔を笑みの形に大きく歪める。

「薄れていく意識の中、オレはお前を、結乃を憎んだ。そのとき、この男が現れた。他の人間であれば、オレには寄生するだけの力も残ってはいなかつた。そもそもオレ自身、何かができるとは思っていなかった。だが、オレとコイツには共通点があった。オレには自分を滅ぼしかけた結乃への怒り、憎悪が。コイツには、結乃への愛が。方向性は真逆だが、阿古屋結乃でありエスフェールという存在への執着。その一点が、オレとコイツを結びつけた。オレ自身が想像していたよりも遙かに強く、深くな。おかげでこうして生き残ることができ、その上、お前の純潔まで奪うことができたわけだ」

「あつくんは今、どうしてるの……?」

「意識はある。表に出せないだけでな。コイツからすれば夢を見ているようなものだろうよ。もちろん、オレがその気になればいつでもコイツを消すことはできるがな」

「やめて！ お願い、だから……」

懇願する結乃を見て、クオルツは満足げに笑う。

「それはお前の態度次第だ」

自分がエスフェールだったから、そんな自分が愛してしまったから、晶を危険に晒してしまった。そんな罪悪感もある。未だに状況は予断を許さない。

しかしそれ以上に結乃は安堵していた。

クオルツという怨敵を介しての、最悪の伝言ではあるものの、晶が自分のことを愛してくれていたことだけは真実だとわかったから。負の方向に結果は向かってしまった。しかし、そんな奇跡を起こしてしまふほど強い想いを、自分に向けてくれていた。その事実だけで充分だった。

既に、身体の震えは止まっていた。

(絶対に助ける……)

そして晶本人の口から、今度こそ、その想いを告げられたい。そんな想いが、結乃を奮い立たせる。

「何が望みな……どうしたら、あつくんを返してくれるの!？」
幻魔に対して、希うことがどれほど無意味なことなのか、結乃もわかっている。わかっている。そうすることしかできない。

「そんなの決まってるだろ?」

クオルツは、晶の顔で餓狼の笑みを浮かべる。

舐めるような劣情の視線。その瞳は身体ではなく、魂に直接欲望を注がれているようで、結乃は肌が粟立つのを感じた。

「——お前だよ。結乃。その身体が、その魂が、オレは欲しい。

この男——播磨晶のことが大事ならば、オレにその身を差し出せ」

それはつまり、無抵抗に犯される、ということだ。愛する男性を人質にとった最悪の陵辱者に。

幻魔の体液は魔性の媚薬。普通の人間であれば、あまりの快楽に発狂しかねないほどの。

希晶石の加護によってその影響を抑えられてはいるものの、それも完全に無効化できるわけではない。

それを子宮という、女性にとって最も重要な器官に注ぎ込まれたのだ。

それでも、相手が幻魔であるとわかっていたならば、希晶石の加護によって影響は最低限に軽減できただろう。希晶石は、結乃への害悪を無条件で無効化するものではない。結乃の意思が拒んだものを拒絶するものだからだ。

だが、ほんの今まで、最愛の男性であると思い込んでいた。

最愛の男性の愛を、情欲を、無条件に受け入れようとしたその意思によって、子宮に注がれた魔精の瘴気は結乃を蝕み続けている。

胎の底から湧き上がる、狂おしいほど甘美な誘惑に抗わなければならぬ。

それでも、結乃に迷いはなかった。

「わかりました……けど、条件があります」

「条件が出せる立場だとも？　と言いたいところだが、聞くだけ聞いてやる」

「私のことはどうしたっていい。だけど、他の人には手を出さないこと」

それだけは、結乃にとっても譲れないところだった。

晶を救い出せるのならば、身体を差し出すことくらい苦でもない。しかし、そのせいで他の人々に危害が加わることは、どうしても受け入れられなかった。

「もし守られないなら、たとえそれであっくんを喪うことになっても――」

そこまで言って、自分が口にした仮定の言葉に、結乃は吐き気を覚えた。そんな選択肢はとりたくない。それでも、言わないわけにはいかなかった。

「あなたを、浄化します」

「ほう……そんなことができるのか？」

「自分の大切な人を助けるために、他の人を犠牲になんてしたら、私はもう、二度とあっくんに顔向けできないから」

約束は守りなさい、と結乃は言わない。

たとえ念押しをして、それにクォルツが頷いたところで、幻魔の言葉を信じられるわけがないし、信じるつもりもなかった。

「そうだ。そんなお前だから、俺は惹かれたんだ」

その言葉に、結乃は違和感を覚えた。

クォルツから放たれていた邪悪な気配が薄れたような気がしたのだ。

「え……？」

だがそれも一瞬。瞬きをした次の瞬間には、クォルツの瞳にはそれまで通りの邪欲の炎が灯っているだけだった。

「まあいいだろう。お前さえ手に入るのならば、路傍の石などどうでもいい。そうだな……オレのことは御主人様と呼ぶことだ。何事

も、雰囲気からと言うだろうか？」

本気なのか、あるいは冗談を言っているつもりなのか。そんなところだけは少しだけ晶に似ているような気がして、慌てて結乃はその考えを消し去った。

（身体は同じでも……あつくんの記憶を見られるんだとしても、コイツはあつくんじゃない……！）

「返事はどうした？」

「わかり、ました……御主人様……」

言われたとおりの呼び方で呼ぶと、ドクンッ、と。まるで従順な隷奴を褒めるかのように、下腹の奥で熱が脈打つ。

「では、早速命令するでしょうか」

ニヤニヤと、下卑た笑みを浮かべたクオルツは、何かを思いついたように頬をさらに釣り上げた。

「おねだりをしてもらおうか。自分の口で、オレのチンポをねだつてみせる」

「そんな、ことっ……」

「どうした？ この身体の持ち主よりも自分の貞操の方が大事だとしても？」

晶の顔で、晶が浮かべることのない邪悪な表情を浮かべる。

晶の声で、晶が発することのない下劣な声を発する。

「そんなこと、ありませんっ……」

「なら早くしろ。もちろん、媚びた笑顔も忘れないようにな」

「ッ……はい……」

結乃は寝台の上に乗ると、大きく脚を開いて見せる。晶衣のクロ

ッチ部分を押し退け、精を注がれたばかりの割れ目を逆向きのV字で割り開く。

「お願い、します……御主人様……私のことを……犯して、ください……」

晶だと思っていたときは違う、屈辱による羞恥で、身体が発火しそうなくらい熱くなる。

ククク、と。堪えるような嘲笑。

「なんの面白味もない言葉だが、まあいい。むしろ無垢であればあるだけ墮とし甲斐がある。それに、オレを倒したあのエスフェールがオレのチンポをねだっているというだけでこれ以上なく——それ、」

笑いながら、クオルツは結乃を再び寝台に押し倒した。

「んっ……♥」

ドクンッ、と子宮が高鳴る。催淫体液によって火照った身体は、その蛮行に不快ではなく、快の反応を見せてしまう。

下腹に触れる熱。射精したばかりのはずなのに疲れをまるで感じさせない怒張が、焼き鏝のように下腹に押し当てられていた。

先ほどまで愛おしく感じていたものと、物理的にはなにも変わらないはずのそれは、しかし今や、おぞましい肉の凶器にしか思えなかった。

結乃自身の蜜にも濡れたそれが、ビクンと脈打つ。

欲しい。

煮え滾る子宮の奥から、言葉にならない欲求そのものが響いてくる。



欲しい。欲しい。欲しい。

欲しくて堪らない。

もつと、もつと、もつと。

精子を注いで欲しい。

膣内^{ナカ}をほじくってほしい。

自分の深い場所を、気持ちいい部分を突いて欲しい。

命じられたからではなく、身体の奥から湧き出す欲求ゆえに溢れそうになるおねだりの言葉を噛み殺して結乃はクオルツを睨み上げる。

射貫かれた者を射殺しそうなほどの怒りを秘めた視線にも、クオルツは動じない。それどころか、まるで結乃の葛藤を見透かしたように、クオルツは笑みを浮かべた。

「さっきまでのおままごとは、この身体の持ち主が思い描いていたものをなぞって再現してやっただけだ。ここからは本気でお前を墮としに行く」

「さっきまでは本気じゃなかった、だなんて……よくある言い訳ね……」

本能が訴えかけてくる墮落の誘惑に抗いながら、結乃は軽口を叩く。

「言い訳？ 違うな。オレは覚悟をしろと言っているんだ。お前という寶石に砕けてもらっては困る。オレが欲しいのは砕け散った寶石の欠片などではない。砕けぬように処理^{シヨリ}をして、オレ好みの淫らで邪悪なオンナへと生まれ変わらせる。お前はオレの妃となるのだ」

「私は、そんなものになんてなりません！」

「その気丈さがいつまでもつか見物だな」

毅然と言いつ返し結乃の割れ目に、肉棒の先端が押し当てられる。

「ふあ、んっ……♡」

それだけでも、昂ぶらされた身体は甘い吐息を漏らしてしまう。

「良い声を出す。まだ挿入^{サシ}してもいけないのにそれでは、先が思いやられる。簡単に堕ちてオレを失望させるな……よっ！」

餓狼の笑みを浮かべながら、クオルツは肉棒を結乃へと突き立てた。

ずぶぶうっ！ と、先ほどまでの行為で充分すぎるほどに濡れていた結乃の割れ目は、クオルツを一息で根元まで受け入れた。

陵辱者による挿入など、どれほど敏感な性感帯を刺激されようと嫌悪感しかない。

そのはずなのに。

「——ッ♡」

あまりの快感に、目の前が白んだ。

喉から抜けた甘い吐息が、骨を伝って鼓膜に届いてはじめて、結乃は自分が、驚くほどいやらしい声を上げてしまったのだと気づき、慌てて唇を噛みしめる。咄嗟^{トツゼ}のことで加減が効かず、口の中には鉄の味が広がった。

(にやに、これえ……♡)

一度イッたばかりで身体が敏感になっているというのもある。

幻魔としての能力のほとんどを使えないとはいえ、その体液には女性^{メス}性を狂わせる催淫作用に加え、無抵抗に子宮にその精を受けてし

まった。

しかしそれは、元よりわかっていたことだった。わかった上で、耐えられるものだと判断していた。

だが、違った。

敏感になっっているから、などという理由ではなく、単純に、巧い。性器を突き込む角度に速度、緩急。技巧によって調整できるあらゆるものが絶妙で、先ほどまでとは比べものにもならない、最低で極上の快感だった。

数呼吸置いても、まだ目の奥で火花が散っているような錯覚が残る。そのせいで余計に、奥まで自分を挿し貫く肉槍に意識が向く。

熱い。それに、先ほどよりも硬くなっているような気すらする。表面に浮かんでいた血管のかたちを思い出し、膣壁に伝わってくる凹凸と照合してしまう。

血管に通う血流の動きすらもわかるほど、鮮明に、無意識がクオルツの肉棒の感触を読み取るうとしていた。

「気持ちいいか、結乃？」

不意に、クオルツが晶の声音で語りかけてくる。

演技だと頭ではわかっているのに、必死に持ち続けていた嫌悪感が一気に薄れる。無視しようとしていた膣内を押し拡げる体積を、その熱と硬さを、膣が収縮し、キュウと締めつけてしまう。

「さつきより締まりが良くなっているぞ？ 愛しい男に抱かれるよりも、憎い敵に犯される方が興奮するの？」

「そんな、ことっ……」

ない、と否定しようとして、

「結乃はどうしようもない淫乱だな」

再度晶の声音で告げられて、咄嗟に晶の身体に抱きついてしまう。そんな結乃の反応に、クオルツはくくく、と笑声を零す。

「お前は本当に面白いな。頭ではわかっている、そんなにこの男が恋しいか」

「この、卑怯者っ……」

「くくくっ。それはオレにとっては褒め言葉だぞ？」

根元まで埋まった肉棒がゆっくりと引き抜かれていく。

「ん、あ、ああっ……♥」

挿入されたときと同様に、嫌悪感を振り絞っても、上書きされるほどの凄まじい快感に、甘ったるい媚びた喘ぎが漏れてしまう。

頭では感じる姿など見せるものかと思っても、結乃の身体は快樂に對してもあまりにも正直だった。結乃の意思に反し、もっともつ

とと言わんばかりに肉杭へ絡みつき、吸い付き、放そうとしない。

「たくさんの牝を犯してきたが、これほどの淫乱も珍しい。それも、精神は清いというのだから余計にそそってくれる」

「ああ……はっ、んひっ……♥」

腰を引くたびに、カリ首が膣壁を引っ搔いていき、ゾクゾクとした感覚が結乃を苛む。

天にも昇る法悦も束の間、肉竿が抜けきる寸前で再び最深部へと叩きつけられる。たった一往復で脳天にまで響くような衝撃と快樂を叩きこまれてしまえば、もう駄目だった。

快樂の絶頂に至り、意識がホワイトアウトする。白痴化した思考の空白に、多幸福感が雪崩れ込んでいく。

畳みかけるように、クオルツは抽送を開始する。宣言通り、晶を装っていたときは違い暴力的な、それでいて比べものにならないほど巧みな快樂の流し込み。

パンツ、パンツ、パチュンツ、バチュンツ、グヂュツ、ズチュツ！
室内に肌と粘膜とが激しくぶつかり合う淫音が響き渡る。

「んいっ♥ あっ♥ おおっ♥ らめっ♥ 嫌っ♥」

これまで経験したことの無い、未知の快樂に抗うすべを結乃は知らなかった。肉棒が突き込まれるたび、引き抜かれるたび、結乃の口からは次々と情けない声上がり続ける。それがクオルツを悦ばせることになる。理解していても、結乃にはもう自分の身体を制御することもできなかった。

「どうした？ お前の膣はどんどんオレに媚びてくる、ぞ！」

力強く突き込まれた亀頭が子宮口にめり込む。結乃自身の愛液と混ざり合った催淫体液が掻き混ぜられて子宮全体を熱く疼かせる。

身体の内側から燃え上がる淫熱は、そのまま全身に伝播し、汗腺からも体液を滲ませるほどに結乃の体温を高めていた。

「んあああっ……♥ おっ♥ おおっ♥」

口の端から唾液が垂らし、瞳は焦点を失いながらも、結乃は懸命に耐えていた。快樂に屈服してしまいそうになるのを、心の中で何度も反駁して踏み留まる。

しかし、同時に結乃の身体は、結乃の心を裏切り、快樂に溺れていた。晶の肉体で犯されているという背徳的な状況に、結乃の思考は乱れ、理性は溶かされていく。

心と身体が乖離していく。

その隙を見逃すクオルツではなかった。

「くくっ。イキたいんだろ？」

クオルツが、晶の声で囁いた。

「晶の身体でイカせてほしいんだろ？」

その言葉に、結乃の膣がキュウツと締まった。

「ちが、違うう……♥ わたし、そんなこと……思っていない……♥

あひいっ♥」

否定しながらも、結乃の言葉尻には甘い媚びが含まれていた。

無意識のうちに腰がくねり、少しでも子宮口を虐めてもらおうとしているかのように、結乃は自ら子宮口を突き上げるような動きをしていた。

「素直になれよ、結乃」

囁きと同時に、結乃を責め立てるピストン運動が激しさを増す。

「んおっ!? おおっ♥おっ♥おっ♥——♥」

待ち望んでいた刺激に、結乃は呆気無く絶頂を迎えてしまう。

身体の奥底から湧き上がってくる強烈な快感に、結乃は背中を大きく仰け反らせながら舌を出して悶え狂う。

「ああっ♥ あああっ♥ んああああっ♥」

結乃の膣が痙攣するように激しく収縮を繰り返し、クオルツの肉棒に絡みつく。

「くくっ。凄い締め付けだな。そんなにオレのモノが気に入ったか？」

「はあ、はあ……そんなわけ、あるもんですか……」

絶頂の余韻に息を荒げつつも、結乃はクオルツの問いに答える。

あれほど乱れては自分の言葉に説得力がないことは、結乃が一番わかってる。それでも、一度でもそれを認めてしまえば、もう抗えない。クオルツの与える法悦にはそんなあまりにも甘美な魅力があった。

「まだそんな減らず口が叩けるとは大したものだ。だが、お前の身体はオレを求めているぞ？」

クオルツの吐息に首筋を舐められて、結乃の身体から力が抜けた。

「ふあ……♡」

ゾクゾクとした感覚に身震いし、結乃は小さく喘ぎ声を漏らしてしまう。

「ほれ、見てみる。お前の身体はこんなにも悦んでいる」

クオルツが結合部を指でなぞる。白濁とした粘液と、結乃自身の愛液とが混じり合い、泡立っていた。

「素直になれ結乃。オレの精をねだれ。最高の絶頂を味わわせてやる」

「そんな、そんな、こと……んっ♡」

結乃が言い終えるより早く、クオルツの腰の動きが再開する。

「んああっ♡ だめえっ♡」

「いいのか？ 色惚けて忘れているのかもしれないが、晶の命はオレが握っているんだぞ？ おねだりだ。結乃」

「く、あ、う、んっ♡」

晶のことを人質に取られれば、結乃に選択肢はなかった。

「ご、しゅ、じん、さまのっ……精液いっ、私の、子宮に、注いで、くださいっ！」

「良い子だ……結乃っ！ いくときはいくと言うんだぞっ！」

杭を打ちつけるような抽送とは裏腹の優しい、晶の声音。直後、クオルツはこれまでで一番強く、腰を打ち込んだ。

ただ乱暴なだけの突き込みではない。暴力的でありながら、結乃の一番敏感な部分を的確に責め立てる一撃に、快感が爆発した。

結乃の頭の中は真っ白になって、直前に言われたとおりのことを従順に実行した。

「イッ……イクッ♡ イッちやううううっ♡」

結乃の口から出たのは、結乃自身、信じられないほどに甘く蕩けた絶頂宣言だった。

絶頂の快感に、結乃の膣がキュッと収縮する。陵辱肉棒を受け入れるように肉壁が密着し、媚びるのを止められない。結乃にできたのはせめて、心だけでも屈しないよう意思を強く持つことだけだった。

「射精すぞっ、結乃っ！ 受け止めろっ！」

獐猛な声を上げながら、クオルツは腰を押しつけてくる。

びゅるっ、ゆるるるるるるうっ！

クオルツの瘴気を帯びた精液が子宮口に直接注ぎ込まれる。

注ぎ込まれた瘴気は希晶石の加護により、一度目ほどの致命的な影響は免れたものの、既に刻まれた官能の起爆剤としては充分な力を持つていた。

お腹から、自分が爆発してしまったのかと思うほどの快感。

「んおおっ……♡ イグううううッ♡ イッてりゆのにっ♡ まらイクウウウウウウッ♡」

もはや結乃は自分が何を言っているのかも理解していなかった。解剖実験の蛙のように、ビクビクと身体を痙攣させながら、背中を大きく仰け反らせる。

結乃は今日一番の——否、人生最高の快感を味わいながら、深いアクメを味わっていた。

ぶしゅっ！　しゃああっ！

尿道口から勢いよく噴き出した透明な液体が、曲線の軌跡を描いてベッドシートに染みを作ってゆく。

「はあっ………♥　はあ………あへえっ………♥」

すべての力を出し尽くしてしまったように、結乃の全身から力が抜ける。

最愛の人の身体に寄生する陵辱者に犯されたことも、今の結乃の頭からは吹き飛んでいた。あるのはただただ、快感の余韻。それ以外に何も考えられないほどのすさまじい絶頂だった。

「くくく………イイ顔になったじゃないか」

嘲弄とともに、クオルツが結乃に突き立ったままの肉棒をずりりと引き抜く。ぽっかりと開いた割れ目から、大量の精液と愛液の混合液がごぼっ、と溢れ出た。

「こんなのはまだまだ序の口だ。お前はいつまで耐えられる？」

クオルツの言葉に、しかし結乃は何も言い返せない。

反論などできるわけがなかった。

今し方、身を以て知ったのだ。

自分がいかに無力で、抵抗など無意味だったかを。

何より恐ろしいのは、その事実、身体が悦んでいるということ

だった。

注がれた子種汁の熱さが、未だ結乃の子宮に残っていた。

結乃の意識は途絶えた。

*

結乃は眠っていた。眠りながら思考していた。

夢の中、というべきなのか。自分以外誰もいない空間に結乃は立っていた。

それはあるいは、希晶石が与えてくれた思考時間だったのかもしれない。

「んっ………♥」

意識を失う直前の快感を思い出して、結乃は身震いする。

(すご、かった………♥)

まるで名残惜しんでいるような反芻を、結乃は首を振って振り払う。

拒まなきゃいけないと、毎秒ごとに自分に言い聞かせなければ溺れてしまいそうな、快楽による暴力。あまりに強烈な快感に、脳神経を灼き切られるような感覚だった。

エスフェールになって以来、結乃は幻魔に敗北したことはなかった。クオルツの戦いを最たるものとして、危機に見舞われたことこそ何度かあれど、実際に敗北し、その餌食になったことは一度もない。

だからこそ知らなかった。幻魔の餌食となった被害者が、どれほ

どの快楽の末に堕ちていったのか。それがどれほど耐えがたいものであったのか。

犯されて初めて、それを思い知った。

幻魔に犯された人々は、最初こそそのおぞましさに恐怖し、嫌悪する。だがすぐに、その魔悦に虜になる。救いに現れた結乃を拒絶し、あまつさえ、共に淫獄に堕ちようと混じりけなしの善意すら見せる。

結乃には、欲望に飲まれ怪物と化した幻魔そのものよりも、人の姿のまま、すべてを捨てて快楽を求めてしまう彼女たちの方が恐ろしかった。

そんな彼女たちの気持ち、今の結乃にはわかる。

思い出しただけで、股間に手が伸び、切なさを覚えた秘裂に指を這わせたくなる。

希晶石に守られている自分ですらそうなのだ。

今はまだ、自制が効いている。

だけどそれも、いつまでも続くとは限らない。否、そう遠くない時期に、限界がきてしまうことは、結乃自身が一番わかっていた。

「私は……どうすればいいの……？」

自分しかいない夢の中で、結乃は誰にといいわけでもなく問いかける。

結乃には晶を見捨てるような選択はできない。

しかし、このままされるがままでいたところで、状況は何も好転しない。

物フィクション語の中であれば、仲間が助けしてくれる展開だが、結乃は一人

だ。

今までそれを孤独と感じたことはなかった。希晶石は結乃に充分な力を与えてくれたし、ともに戦う力はなくても、結乃がエスフェールであるを知って、その苦難を共有してくれる理解者しんゆうがいたから。だがそれも、今は結乃の心の支えにこそなっても、現状を打開する力にはならない。

（私が……自分でなんとかしなくちゃいけないんだ……）

じんじんと、夢の中にまで残る絶頂の余韻を振り払い、結乃は決意する。

「考えなさい。あつくんを助けて、クォルツを倒す方法を……」

考える。考える。考える。

大好きな人を救うための方法を。

「あ……」

不意に、結乃の頭に天啓が降りた。

——ある。

ひとつ、たったひとつだけ、今の結乃にできることが。

その考えは賭けだった。それも、失敗すれば取り返しをつかないほどの賭け金ベットが必要な悪魔の大博打。

それでも、結乃には他に選択肢がない。

今この瞬間にも、屈してしまえと囁きかけてくる自分がある。

そしてその声は次第に大きくなっていく。

たとえ賭けであっても、その失敗の代償がどれほど大きなものだとしても、何もしないよりもマシなのは間違いなかった。

（あつくんが知ったら多分、怒るよね……）

自分がとろうとしていることの危険性を考えて、結乃は思う。

正義感の強い晶なら、そんな手段を選んだことを非難するだろう。

(それでも、私は——)

結乃は小さく、自分に言い聞かせるように頷いた。

心は、決まった。

それを待っていたかのように、結乃の意識が浮上していく。

*

ゆっくりと、ゆっくりと、意識が浮かび上がってくる。

最初に感じたのは——渴き。

眠る前に何をしていたのかよりも、自分がどんな状況に置かれているのかよりも優先して生まれたその欲求に、身体は反射的に従った。左手が大ぶりの乳房に指を埋める。ぐにゆりとした柔らかい感触が返ってくるのと同時、甘い官能電流が全身を駆け、結乃は小さく仰け反った。その官能がさらなる渴きを自覚させる。右手は股間に向かい、クロッチを除けて目当ての場所に触れた。

ぐちゆり、という、いつも触れるときよりもずっと重く、粘り気の強い音。

「んっ………♥」

官能を示す甘い声が溢れて、そこで——目が、覚めた。

数瞬遅れて、自分が置かれている状況を思い出し、秘唇を割り開こうとしていた手指を引っ込める。

「っ………！」

「どうした？ 起き抜けのオナニー・ショウでも見られるかと思っただがな」

「そっ、そんなことしませんっ………！」

否定こそしたものの、時間が経ったことで注がれた瘴気による影響が増しているのか、身体の火照りは明らかに増して、もはやどうしようもないほどまで昂ぶっていた。

(だめ………なのに………オナニー、したい………自分で触っちゃったせいで、余計にっ………ああ、でも………本当に、欲しいのは………)

太ももを擦り合わせながら、結乃の視線はクオルツの股間に向く。どれくらい意識を失っていたのかはわからないが、あれほど射精したはずなのに、そこには未だに肉槍が屹立したままだった。

「なあ………結乃」

クオルツが語りかけてくる。その声音は晶のものに似ていたが、晶を真似ているというわけではなさそうだった。

「もう一度言う。結乃、オレの妃メドになれ」

「そんなもの、私は絶対にならないっ………」

「気丈だな。あれだけの官能を味わって、淫らに啼いていたというのに」

結乃の頑なな拒絶にも、クオルツに苛立つ様子はなかった。

その余裕が結乃には怖かった。クオルツには、このまま結乃を責め続けられ、墮とせるといふ確信があるのだとわかるから。

そしてその確信が、単なる傲りではないことを理解しているから。何よりもあとどれだけ自分が快楽に耐えられるのか、わからない。

最初は、どんな責め苦を受けようと、いつまでも耐えられると思

っていた。だが、それは無理だ。子宮に獣欲を放たれるあの官能、法悦は、思い出ただけでも結乃の理性を蝕んでくるほどのものだ。

「最初は憎悪だった」

不意に、クオルツがそう呟いた。

まるでひとり言を話しているような声音で、結乃は一瞬、それが自分に向けられた言葉だと気付けなかった。

「オレを負かした女を手に入れたという欲求。美しい牝を求める本能。そしてアブリル・アルマースの遺産を得るための手段として欲していただけだった」

クオルツが言葉を切った。顧みるように、胸に手を当てる。そこに今も確かに在る人物を想うように。

「だが、この男の愛は強かった。寄生した側のオレという存在を歪めるほどに。オレが獲物に拘泥するのははじめてのことだ。今のオレは、幻魔の本能としてだけではなく、遺産を得るための手段としてでもなく——」

クオルツの瞳は、結乃を見ていた。

獣欲の炎が爛々と輝く、餓えた瞳。しかしその瞳は、確かに結乃一人を見つめていた。真摯、という言葉すら相応しいほどに。

トクン、と。

まるで恋する乙女のように、結乃の子宮ココロが高鳴った。

「結乃。俺はお前を——欲あしている」

「なっ……」

身勝手な言葉だった。

晶の身体を乗っ取って、それを人質に無理矢理犯して。

そんな男に告白されて、喜ぶ人間がいるはずがない。

(それ、なのに……)

結乃は菌を食い縛って耐えていた。そうしなければ、蕩けた吐息が漏れそうだったから。

晶に告白されたと思ったときと同じ——あるいは、それ以上の多幸感が子宮に広がるのを感じる。感じてしまう。

「だから——お前を、墮とす」

クオルツの、不自然なほど昏い影から、ぬるりと不気味な触手が伸びて結乃の身体を、四肢を、搦め捕っていく。

強靱な筋繊維によって構成された触手が結乃の身体を持ち上げる。今の結乃には、それらを引き千切るだけの力はなかった。

「気持ちいいのだろうか？ 幸せなのだろうか？ ならば無駄な抵抗はやめてオレの妃メになれ。希晶石の無粋な加護さえなければ、今以上の快感を与えてやれる」

理性の鎖に必死に捕まり続ける結乃に、さらなる快感という餌が吊り下げられる。

ギシギシと、鎖が軋む音が聞こえた。

その中の一本が、結乃の目の前に突きだされる。

無数の触手の中で、一目見てわかるほど、明らかに太い一本だった。

おぞましさを覚えるよりも先に、すごい、と。

「あ……♥」

感嘆の念が、吐息となって漏れた。

「それは本来のオレのモノの形状カタチを模している。コイツの身体より

もはるかに優れた牡の性器だ」

結乃の瞳は、雄々しい肉の屹立に釘付けにされていた。見ているだけで理性がドロドロに融け落ちてゆく。漂ってくる臭気はそれまでとは比べものにならないくらい強い牡の匂い。

たつぷりとその精を注がれた子宮が熱を持つ。子宮に灯った淫らかな熱が、胸の高鳴りに送り出されて全身を駆け巡る。

ピキ、と。硬質な音が結乃の胸元から生まれた。

晶衣の各所を飾る真珠の意匠。その中でも最も大きなものに、亀裂が入っていた。

まるで、結乃自身の心を暗喩するかのよう。

息を吸えば吸うほどに、触手ペニスから漂ってくる濃厚な牡の匂いが頭のなかにまわる。

脳味噌を直接掻き混ぜられるようなその匂いが、結乃のただでさえ薄れた理性を希釈してゆく。

ゆっくりと、触手ペニスが結乃の顔に近づいてくる。

口の中に溢れんばかりの唾液が満ちて、口端から垂れていく。

結乃の瞳は、雄々しい肉の屹立に釘付けだった。見ているだけで理性がドロドロに融け落ちてゆく。漂ってくる臭気はそれまでとは比べものにならないくらい強い牡の匂い。

口の中に溢れんばかりの唾液が満ちて、口端から垂れていく。

晶の、愛しい人の身体を穢すことへの罪悪感が、ほんの少しだけ残っていた。

しかしそれも、子宮から全身へと広がる淫らな欲求に飲まれて、どこにあるかもわからなくなった。

結乃の眼前に、触手が迫る。

視界いっぱいには拡がる、太く、長く、たくましい剛直。

結乃は無意識のうち目を閉じていた。だがそれは決して、迫る誘惑をはね除けるためではなく、

ちゅっ。

リップ音を立てて、結乃の唇がその先端にキスをした。淫猥なこの状況によって不自然なほど軽い、初心な恋人同士がするようなキス。

だがそれが、結乃の答えだった。ゆっくりと目蓋を開き、結乃は微笑んだ。

そこにはもう、先程までの頑なな拒絶の意志はない。

あるのは、淫らに墮落した一人の牝の姿だった。

「さあ、言え。どんな言葉を言えば良いか、今のお前ならばわかるはずだ」

クオルツの言葉に、結乃はコクンと頷くと、粘る唾液を呑み込んで、答える。

「私を……阿古屋結乃を、エスフェールを、御主人様の、妃メスにしてください……♥」

結乃の答えに、クオルツは獣の笑みを浮かべる。今にも雄叫びを上げかねないほどの喜びがあった。

結乃を絡めていた触手の群れが、結乃に脚を開かせようとするのに、結乃はもはや抗わなかった。むしろ自らの意思で股を開き、しとどに濡れた淫裂をクオルツへと差し出すように突き出す。

巨根触手がゆっくりと、結乃を焦らすように顔から、股へと近づ

く。待ちきれないとも言いたげに、結乃がその身を振らせる。
ぐちゅうっ。

結乃の求めに応じて、クオルツの真の怒張が、結乃の子宮に突き
立った。

すでに大量の愛液で満たされていた腔内は、何の抵抗もなく、歓
待の愛撫をもって触手巨根を受け入れた。

極太の触手が結乃の腔内を蹂躪していく。それまでとは桁違いに
太い肉の槍が、結乃の狭い腔道をみちみちと音を立てて押し拡げて
ゆく。

容赦の無い突き込みは、一息で結乃の最奥に達し、結乃の意識を
快樂の絶頂へと押し上げる。

「んいっ♡ しゅごっ♡ ごしゅじん、さまのおっ♡ 触手ちん
ぽっ♡ 太くてえっ♡ 奥っ♡ 子宮、届いてるっ♡」

無粋な希晶石の加護は消えていた。ほんの一滴で、女性を狂わせ
牝へと変える魔性の媚毒は、阻むものをなくして結乃の身体に一斉
に襲いかかる。

みちみちと、まだ処女を失ってから半日と経っていない結乃の腔
道にあまりに太い肉の杭は、しかし結乃にとって苦痛を与えるもの
ではなかった。

むしろその逆。あまりにも甘美すぎる快感。

結乃は喉の奥から甘い声を漏らしながら、触手を受け入れ、そし
て迎え入れる。

「どうだ？ 晶のチンポと比べてどちらが良い？ オレの中で聞いて
いるコイツに聞かせてやれ」

「こっちっ♡ こっちいい♡ 御主人様の触手チンポの方があつ
♡ あっくんのチンポよりイイですうっ♡」

宣言と同時に、これまでのように意思に反してではなく、はじめて、
結乃自身の意思に従って、腔が肉棒に吸いつく。

「いやらしい締め付けだ」
っ♡

たった一度、片道だけの抽送だというのに、これまでで最高の快
感だった。

今まで拒み続けてきたことが、あまりにも馬鹿らしくなるほどに。
気付いてしまえば、それまで蓋をしていた欲求が溢れ出す。

もっと欲しい。もっと奥に。結乃の身体がそう訴えていた。
「んいっ♡ しゅごっ♡ ごしゅじん、さまのおっ♡ 触手ちん
ぽっ♡ 太くてえっ♡ 奥っ♡ 子宮、届いてるっ♡」

無粋な希晶石の加護は消えていた。ほんの一滴で、女性を狂わせ
牝へと変える魔性の媚毒は、阻むものをなくして結乃の身体に一斉
に襲いかかる。

みちみちと、まだ処女を失ってから半日と経っていない結乃の腔
道にあまりに太い肉の杭は、しかし結乃にとって苦痛を与えるもの
ではなかった。

むしろその逆。あまりにも甘美すぎる快感。

結乃は喉の奥から甘い声を漏らしながら、触手を受け入れ、そし
て迎え入れる。

それでも、結乃は満足できなかった。もっと欲しい。もっと奥に。
結乃の身体がそう訴えていた。

「もつつ♡ もつろつ♡ ごしゅじんさまあつ♡」

結乃は腰を浮かせると、自ら進んで触手を最深部に招き入れた。

子宮口が龟头に吸い付き、精を搾り取ろうとする。

「一度、^ガが外れればこうも乱れるか。くくく……やはりお前は最高に魅力的だ……愛する^{オシナ}妃の素直なおねだりには、答えてやらねばな」

クオルツの影から、新たな触手が伸びる。結乃を蹂躪しているものと寸分違わず同じ極太の肉槍は、胸元に劣らず肉感的で男の劣情をそそる結乃の尻に狙いを定めていた。

「どうだ？ 欲しいか？」

問いかげに、結乃はその意図を悟り、壊れた絡繰り人形のようにかくかくと首を振る。

「はいっ♡ 欲しひれすうっ♡ 御主人様のぶっとい触手チンポっ、

ケツマンコにハメて欲しいですっ♡」

結乃の懇願に、クオルツは愉快そうに笑うと、触手の穂先を結乃の肛門に押し当てた。

「あっ……♡ あああっ……♡」

期待と興奮と恐怖がない交ぜになった吐息が漏れる。触手の先端が、結乃の菊門を押し広げて侵入してくる。

当然、結乃には尻穴での性経験はないし、自慰に使ったこともなかった。しかし瘴気に犯された結乃の処女尻穴は、普通ならば割けてしまうほどの極太を嬉々として呑み込んでゆく。

凄まじい圧迫感。本来排泄のためにある器官が、強引に拡張されていく。だがそれは痛みではなかった。熱くて太い触手の感覚は、

結乃にとってはもはや幸福そのものだった。

「ああっ♡ これえ♡ すごいっ♡」

「尻穴ばかりではなく、こちらも忘れるなよ」

膣内を蹂躪する肉棒が抽送を再開する。お腹の奥で、太く、硬い触手肉棒が内臓の壁を挟んで擦れ合う快感に結乃は大きく背を仰げ反らせる。

「んあああっ♡ すごいっ♡ 触手おちんぼ二本っ♡ おまんことお尻同時にされるのきもちいいのおっ♡」

触手が引き抜かれる度に、膣襞が、腸壁が、引きずり出されそうになる錯覚に襲われる。そして再び触手ペニスが入ってくるときは、膣奥まで一気に貫かれる衝撃に、結乃は思わず悲鳴のような嬌声を上げた。

「うっ、ふぎゅうううううううううううっ♡」

「くっ……結乃っ……射精すぞっ！ オレの瘴気をすべて注ぎ込み、お前の身体も、精神も、邪淫に染め上げてやるっ！」

そうなればもう、取り返しはつかない。

刹那、結乃の脳裏に晶の顔が浮かんだ。

（あっ……くん……）

だがそれも、両穴抽送の快楽に押し流されて消えてゆく。

「はひっ♡ はひいっ♡ ごしゅじんしゃまのっ♡ 瘴気でえっ♡

わたしのことっ♡ 染め上げてくださいいっ♡」

「受けとれっ！ そして、生まれ変われっ！」

触手ペニスが結乃の最奥に叩きつけられた瞬間、結乃は身体を大きく痙攣させる。視界が真っ白に染まり、思考が弾ける。



同時に、触手もまた結乃の子宮に大量の精液を注ぎ込んだ。

まるで子宮そのものが沸騰してしまいそうな灼熱の奔流に、結乃は身体を震わせる。熱い。ただひたすらに、全身を駆け巡る快楽が熱かった。

全身の、あらゆる感覚器官を使って、結乃は偉大な主人の瘴気を堪能する。ゾクゾクと、背筋を背徳の快感が駆けてゆく。

そのときだった。

「あ、がっ……」

結乃と同様に快楽に身を震わせていたクオルツが、突如として苦悶の声を上げたのだ。

「これは……結乃、何をしたっ!？」

クオルツが、晶の顔に戸惑いを浮かべて叫ぶ。

快楽の余韻に頭の回らなかった結乃は、その言葉の意味がわからなかった。

（わたしは……御主人様の、妃……御主人様に危害を加えることなんて、ありえないのに……♥）

数秒遅れて、結乃の頭の中に電流が走った。

（そう、だ……）

希晶石の加護が、ぼやけた思考を補正していく。快楽の余韻は抜けきらず、その顔は抑えきれない緩みが残っているものの、その瞳には先ほどまでとは明らかに違う、理性の色が再び灯っていた。

「封印、よ……」

告げた結乃は、すべてを思い出し、出していた。

身体の火照りも、疼きも、完全に消えたわけではない。そんな馬鹿なことはやめて、偉大な御主人様に隷属したいという気持ちも残っている。しかし今の結乃には希望があった。

「なん、だと……?」

結乃にはクオルツを浄化することはできない。

正確には、浄化するだけならばこれまで幻魔に対してしてきたように浄化するだけでいい。しかしクオルツは、晶の精神に根を張っている。ただ浄化するだけではクオルツを倒すことはできても、晶を救うことはできない。

だが、ひとつ例外がある。

クオルツが晶にしがみつく力が弱まったときだ。

結乃が快楽に完全に屈したとき、クオルツはその瘴気のすべてをもつて結乃の希晶石を汚染しようとする。

そう思ったからこそ、結乃は自分に二つの術を掛けた。

ひとつは封印術。クオルツが自分にすべてを注ぎ込もうとしたそのときに自動で発動する致命の罠。

もうひとつが記憶操作。そんな致命の罠を仕掛けたことを自分自身の記憶からも消し去ることで、万が一にもその企てを気付かれなないようにするために。

「私は、あなたを封印するための術をかけ、自分の記憶を消した。

私が完全に堕ちたとあなたが、私自身までもがそう確信するときに起動するよう条件を付けて」

もちろんこれは賭けだった。

なにせ、自分が快楽に屈することを前提とした作戦なのだから。

上辺だけの演技でクオルツは騙せない。もしそのまま、本当に自

分がクオルツの従順なしもべとなってしまうたら。

幻魔に対抗する力はこの世界のどこにもない。それこそ世界中に幻魔が拡散し、欲望に突き動かされた怪物たちが潜み、隠れることすらなく罪もない人々を陵辱し蹂躪する悪夢のような世界になってしまうかもしれない。

世界を守る英雄ならば、そうならないよう、愛する人を失うかもしれないなくても、クオルツを倒すべきだったのだろう。

結乃は聡明な人間だ。

頭の中でリスクとリターンを釣り合いにかけて、どうすることが正解か導き出すことができる。

一人の人間と世界の危機。どちらを選ぶのが正しいのか。

それ以前に、たとえこの場で晶一人を救う方法があったとして、世界が滅茶苦茶になってしまえば生きていくことはできない。

選択肢はふたつあるようでひとつ。間違いのないほどに答えは明快。

それでも、結乃には選べなかった。

そうするべきだと、それがエスフェールとしての義務だとわかっていても。

生きていく世界が壊れてしまうかもしれないのだとしても。

晶を犠牲にするという選択肢だけは、選べなかった。

しかし、結果として――

「私の、勝ちよ！」

結乃は、賭けに勝った。

希晶石の光が、子宮に注がれた瘴気を封じていく。

晶という宿主に捕まる力を弱めたクオルツには、それに抗うすべはない。

「おのれっ！ おのれおのれおのれおのれおのれええええええ！ エスフェール！ 結乃おおおおおおお！」

地獄の底から響くような怨嗟の声。その声はもはや、晶の口から発音されてはいなかった。声の発生源は結乃の内側――搦め捕り、すべてを注ぎ込ませた子宮からだった。

「希晶石よ……私に力を貸して……！」

右手の中指に嵌めた真珠の指輪を左手が包み、意志力を流し込む。その所作は敬虔な祈りにも似ていた。

希晶石から強烈な光が生まれた。結乃の想いが力へと変換されてゆく。

クオルツという存在が、戒めを振りほどこうと結乃の子宮で荒れ狂うのを、希晶石から生まれた光が抑えこんでゆく。

二つの意思の力は拮抗しなかった。

響き続けていたその声、消える。

腔内を満たしていた触手が、融けるように影に消え、部屋の中に充滿していた瘴気も消え去った。

「っ……そうだ、あつくん！」

クオルツの存在を感じられなくなったことを確認して、結乃は慌てて晶に駆け寄る。

「大丈夫、かな……！」

息はしている。熱い胸板越しに、確かな鼓動が伝わってくる。

(よかった……)

少なくとも肉体は生きている。あとは目を覚ましてくれるかどうかだ。

「大丈夫……だよね」

自分に言い聞かせるように、結乃は口にする。その眩きのに、

「なんとかな」

予想だにしない返答があった。

「えっ……あつくくん？ もう……気が、ついたの？」

「結乃」

名前が、呼ばれた。

その声を、聞いたかった。

その顔が、見たかった。

あのときの自分は幸福に酔っていたのだろうと結乃は改めて思う。だって、こんなに違う。

晶の思考も、本人すら意識していないような癡まで、何もかもを再現したと言っていたが、今ならわかる。

本物の晶は、こんなにも、温かい。

その真贋も見極められないなんて、目が曇っていたと言われても仕方がない。

歓喜のあまり叫んでしまいそうになる自分を、結乃はなんとか抑えこむ。

「あの、ね……」

「大丈夫だ。全部……じゃないけど、アイツに寄生されてからのことは覚えてる。だから、言わなくていい」

クオルツは言っていた。晶は、クオルツに寄生されていた間も、

その意識を保っていたのだと。夢を見ているかのような感覚で、すべてを見ているのだと。

それはつまり、晶はすべてを知っているということだ。クオルツの罪を、自らの肉体が犯したすべてを。

「あつくくん。あのね……聞いてほしいことがあるの」

結乃の言葉に、晶は無言で顎を引いた。

「私——あつくくんのことが好きだった。ずっとずっと、ずっと昔から。最初は意地悪で嫌なヤツだと思ってた。だけどあのとき溺れてるところを助けてもらって、あつくくんが本当は全部私のためにしてくれてたんだって気付いて——嬉しかったの。それからずっと、あつくくんのことばかり考えるようになった。英雄ヒーローみたいに憧れて、だけどいつからか、男の子として好きなんだって気付いた。あつくくんみたいに優しい人に、強い人に、あつくくんの隣に立つことが恥ずかしくない人間になろうと思った。だから私は今まで戦ってこられたの。だから、本当にありがとう」

結乃の長い言葉を、晶は遮らなかった。

聞き終えてからも、晶はただまっすぐ結乃を見つめるだけ。何かを言うこともなければ、更なる言葉を促すわけでもない。

桃色の光が結乃の指先に集まってゆく。

「結乃……何するつもりだ？」

詰問のような晶の問いかけに、結乃は一瞬、何でもない、と答えようとも考えた。

しかし今、晶に対して嘘だけはつきたくなかった。

これが、最後の会話になるのだから。

「あつくんの記憶を消す。もう二度とこんなことが起きないように」

もちろん結乃には、この数日の記憶だけを奪うこともできる。しかしそれは、結乃のエゴだ。

自分の欲望を叶えるために、都合の悪い記憶を消す。そんなことをしたら、それはもう幻魔と何も変わらない。

すべてをなかったことにして元通りに戻ることは、結乃にはできない。

ならばいっそのこと、すべてを忘れさせて、晶への想いを断ち切る。

それが結乃の選択だった。

晶ならば、自分一人を忘れたところで大丈夫だ。たくさんの人に愛される人間だから。そう結乃は自分に言い聞かせる。

晶は結乃が知る中で誰よりも優しい。

クオルツに寄生され、結乃を犯したことで。身体を使われていただけとしても、晶は自分を許せない。結乃自身の油断が招いたことなのに、晶は結乃に対して罪悪感を抱き続けるだろう。

そんな、ありもしない罪を、愛する人に背負わせ続けることは、結乃にはできなかった。

ギリ、という、奥歯を噛み締める音が聞こえて、結乃は晶に視線を向ける。

「ふざけんな」

声を荒げることこそなかったものの、そこには怒気が込められていた。

見たこともない、晶の怒りの形相だった。

(当たり前……だよな)

今回のことはすべて、結乃がエスフェールだったことが原因で起きたことだ。

もし結乃がエスフェールでなければ、あるいはクオルツを完全に浄化してさえいれば、晶が肉体を乗っ取られることはなかったのだ。その上、自分の都合で記憶まで消されると知れば、誰だって怒るに決まっている。

怒りに向けられる覚悟で決意したはずなのに、いざ実際に向けられれば、そんな決意はいとも簡単に崩れていった。

「ごめん、なさい……謝っても許してもらえないようなことじゃないのはわかっている。優しいあつくんに謝って、許されて、罪悪感を軽くしようとする卑怯なことだとも思う。だけど、ごめんなさい。私の……私のせいで、あつくんを巻き込んだ……優しいあつくんは、今回のことを覚えてたら、罪悪感を抱き続けると思う。だから……」

謝罪の言葉が、口を抜けて出てゆく。

その気持ちは本心だった。しかし同時に、言葉を交わしている間だけは、晶に覚えていてもらえる。そんな浅ましい計算があることに、結乃は自己嫌悪する。

それになにより――

(忘れられたく、ないよ……)

晶のためにはその方がいい。理性ではわかっているけど、簡単に割り切るなどできるはずもなかった。謝罪の言葉を口にしながら、

結乃は別れを受け入れるよう、自分の心を凍てつかせてゆく。

「違えよ」

「え……？」

晶の瞳に、声に、もはや怒気は含まれていなかった。あつたのはむしろ、呆れ。

「勘違いしてるぞ。ホントにお前は、俺よりずっと頭良いはずなのに、たまに抜けてるよなあ」

「そんなん、抜けてなんて……」

「俺が怒ったのは、迷惑かけたからなんて理由じゃねえよ」

意外な言葉に、結乃は目をぱちくりさせる。

「もう一度言うぞ。ふざけんよ」

強い語調とは裏腹に、晶は笑っていた。

「そりゃあ、ちよつと嫌な思い出もできたけど、そんなことより、ずっと片想いだと思つて、ビビって告れなかった女の子が、好きだつて言ってくれたんだ。こんなに幸せなことあるわけねえだろ。

俺からこの幸せな気持ち、想いを、奪っていくつて言うなら、それがたとえ結乃、お前自身だつて許さない」

その言葉が決定的だった。

紡いでいた記憶操作の術が霧散する。

乱れた晶衣のままに、結乃は晶に抱きついた。べつとりとこびりついた精液が服に染み込んでも、晶は気にすることなく結乃を受け入れる。

「私も……私もあつくんのことが、好き……大好き……だけど……」

私には、あつくんに好かれる資格なんて、ないよ」

「資格……？」

「私、汚れちゃった。クォルツに犯されて、ヨがって、アイツに屈しようとした……」

「全部見てた。だから知ってる。でもそれは、アイツを倒すための策だったんだろ？ それなら——」

「違うの……確かに私は、クォルツを騙すために自分の記憶も封印した。だけど、その後で快楽に屈しちゃったのは演技じゃなかった！ あのとき私は、本心からアイツの妃になるって……なりたいて思ってたの！ あつくんを助けることなんて忘れて、アイツの、御主人様の触手チンポで滅茶苦茶になるまで犯されたいって思ってたの！ そんな女が！」

「それでも」

晶に好かれる資格なんてない。だからこの恋は諦める。そう自分に言い聞かせるような結乃の言葉を、晶の静かな声が断ち切った。

「それでも俺は、お前のことが好きだ。俺が好きなのはお前だけだ。それだけじゃ……資格には足りないか？」

「あつくん……」

穢らわしい邪精を受け入れて、生臭さの残る唇に、晶は己の唇を重ねてきた。

性的な快楽などとは無縁の、ただ触れるだけの口づけ。

だけど——結乃は幸せだった。

どれだけの時間、初心な口づけを続けただろうか。

どちらからともなく、触れた唇が離れていく。

「ねえ、あつくん……」

「なんだ、結乃？」

「抱いて、くれないかな……」

結乃の言葉に、晶の顔には興奮と、困惑が生まれた。

「そりゃ俺も、お前のそんな格好見てたらアレだけ……いい、のか……？」

つい先ほどまで、結乃はクォルツに陵辱されていたのだ。それも、晶の肉体を使って。

そんな状況で性行為を行えば、結乃の心をどれほど傷つけるかを心配しているのだろう。

しかし、結乃はコクンと静かに頷いた。

「私の穢れを、あつくんで塗り潰して……あつくんの、あつくんだけのものにしてほしいの……」

その言葉に、晶は結乃を押し倒した。

陵辱者とは違う。気遣いと、愛に溢れた、しかし己の中の獣欲も抑えきれてはいなかった。

そして二人は、今度こそ本当の意味で結ばれた。

下腹に刻み込まれた邪淫の証は消えることなく、二人を嘲笑しゆくみくするかのよう、不穏な輝きを帯びていた。

○ 四章

薄ら明るく染まった窓から差し込む朝日で、結乃は目を覚ます。

制服のまま、結乃は寝台に背を預けていた。

目覚まし時計を見れば、時間はまだ六時前。早起きをするにして

もまださすがに早すぎる時間。

夢を——見ていた。

詳しい内容は、頭にモヤがかかったように思い出せない。思い出せるのはそれがとても、とても、いやらしい淫夢ユキムだということ。

幻魔を生み出していた存在——上位幻魔であったクォルツは倒した。

これ以上、新たな幻魔が生まれることはなく、既にクォルツが生み出していた幻魔を全滅させさえすれば、平和な日々が戻ってくる。

それは結乃の、エスフェールからの卒業を意味していた。ヒーローという存在を成り立たせるには悪役が必要だ。

悪役の登場しない平和な世の中に、ヒーローの仕事はない。しかし結乃は別に、ヒーローになりたかったわけではない。

誰かを助けられる人になりたかった。

ただそれは、特別な力がなければできないことではない。それを、他ならぬ晶が言葉ではなく、行動で教えてくれた。

かつて晶が、溺れかけた結乃を助けようとしてくれたように。

あるいは、クォルツの前に飛び出してくれたように。

だから結乃には特別エスフェールであることへの執着はない。

そんなことよりも、たった一人の愛しい人の特別こいびとになれたことの方が、よほど嬉しく、大切なことだった。

幸せだった。

クォルツによって齎された偽りの幸福とは違う。

本当の、大好きな人が、穢れた自分を、それでも好きと言ってくれた。それを幸せに思わない者などいない。

「そうだよ……私は幸せ……すごく、すごく、幸せ……」

語り聞かせるものなどいないのに、結乃は小さく告げた。

まるで、自分にそう言い聞かせるように。

しかし。

「んっ……♥」

目を逸らすな、とでも言うかのように、腹の奥が疼いた。

ドクン、と。

第二の心臓であるかのように、子宮が疼く。

ドクン、ドクンと脈を打つたび、淫らな欲求が全身へと送り込ま

れていく。無意識のうちに太もも同士が擦り合わせられ、くちゅり、

という蜜の音が溢れる。繰り返すたび、その音は重たく、粘性を増

していく。下着はぐっしよりと湿っていて、淫夢の中で味わった快

楽の余韻が、熱となってお腹の奥を疼かせる。

クオルツは倒した。

しかし、現実ゲームのように、ステージをクリアすればそれま

で受けたダメージや状態異常が回復してくれるわけではない。

クオルツによる調教は、結乃の身体に消せない爪痕として残って

いた。あるいは、否応なく快楽を与えられ続けていた調教当時より

も、強烈に。

人を快楽によって堕落させんとする幻魔の責め苦を肯定するわけ

ではない。しかし単純に、快楽の大きさという意味では、人の与え

られる限界をはるかに越えていた。

一度その人外の法悦を味わってしまった結乃の身体は、薬物を断

った薬物中毒者のようなものだった。

気がつくとも、簡単にスイッチが入って、手が胸を、あるいは秘所を刺激してしまう。

気を強く持っているときならば問題はない。しかし、二十四時間気を張り続けていることはできない。

晶に抱き締められたり、口づけをしたときはまだ良い。

そうするときには、人目につかない場所のため、火照りを収めるため、という名目で晶に抱いてもらう。

後遺症を言い訳に使うことに後ろめたさはあったものの、晶と愛を交わせるのは幸せな時間だ。

むしろ問題は、それ以外の時。

ブラが、ショーツが、水着が、身体の敏感になった箇所擦れる

快感でスイッチが入ってしまうことがある。

人目があり、晶も近くにいるとは限らないそのときは、理性を振り絞ってトイレに向かい、自慰をすることで発散するようにしていた。

最悪なのは、異性から向けられるいやらしい視線。

舐めるような視線を向けられていることに気付いただけで、衣擦

れのとくとは比べものにならないほどの火照りに襲われる。すぐに

でも、その視線の主は、視線だけでなく、溜め込んだ下劣な欲望を

自分に向けて吐き出して欲しいと懇願してしまいたいことになるのだ。

何よりも怖いのは、そうになってしまう身体を恥じる自分だけではなく、彼らに、剥きだしの性欲をぶつけられたならばどれだけ気持ち

いいだろうかと思像してしまっている自分がいることだった。

授業中にスイッチが入ってしまったことも、この一週間足らずで

何度もあった。

今も、そう。

毎夜のように淫夢を見て、目を覚ます。

思い出せない、しかし忘れきれない快感を追って、身体が勝手に動いてしまう。

確認するように、制服のスカートの下に右手を滑り込ませる。シルクのショーツのクロッチに触れると、くちゅり、と。粘ついた蜜が染みこんでいた。

ぐちゅり、と。

熟しすぎて腐る寸前の野菜のような、熟れた感触。寝覚めの秘所は、寝小便でもしてしまったのかと思うほどにくちゅり、と湿っていた。溢れた蜜はショーツに染み込み、絞れば滴るほどだろう。

確かめるために触れただけのはずだった指が、ショーツの湿りをなぞる。それだけで、既に限界いっぱいまで蜜を蓄えた布地からは搾りだされるように蜜が染み出した。

「はあ……んっ……」

痺れるような快感が股間から脳天までを一息に貫いて、頭の中が真っ白になった。

まっさらに染まった思考に、夢の中身がうっすらと浮かび上がっては消えていく。

それが自分の、あり得たかも知れない可能性なのだと結乃は半ば夢心地の中で理解した。

幻魔に敗北し、性の虜にされてしまった自分。

あるいは、救いの手を届かせることのできなかつた人々。

それらを思いだしながら、結乃はショーツの内側に指を這わせる。湿った花卉が、男性器代わりの指に媚びるように吸いついて、挿入をねだっているようだった。

薄れて、もはや断片しか残らない記憶を頼りに、結乃は花卉に指を埋める。

細く、華奢な指先は陵辱者の肉棒を模して束ねられる。心なしか熱を増した吐息が喉を抜けること三回、束ねた指がぴたりと閉じた結乃の割れ目を割り開き、膣内へと挿入する。

「んっ……あっ……だめ……」

口先ばかりの拒絶の言葉には、抵抗の意思など含まれていなかった。

一度スイッチが入ると、もう自分の意思では止められなかった。頭の中を淫らな欲求だけが支配し、わずかに残る自制心だけでは止まらない。

——犯される。

恐怖と羞恥を生むはずのその想像に、結乃が上げたのは快感の声だった。キュウ、キュウツと指に絡み締めつける肉壁を押し拡げながら、指肉棒は奥へと進んでいく。空いた左手はワイシャツのボタンを千切らんばかりの乱暴さでこじ開け、その下の豊満な乳房へと指を埋める。

「んうっ——♡」

張った乳肉に伝わる指の感触が声を漏らさせた。太く、逞しい牡を求めていた膣内は敏感で、二本束ねてもなお細い肉棒の紛い物の感触だけで、結乃の視界の奥でバチリと光が弾けた。結乃の背が軽



く仰け反り、栗色の髪を帯びた頭が枕に押しつけられる。

ただ挿入^いただけで自分が軽くとはいえイッてしまったのだと、甘い絶頂の余韻に麻痺した思考のまま、結乃は理解する。

その快感で、わずかながらに残っていた自制の心は、今度こそ吹き飛んだ。希晶石に力を込め、部屋に結界を貼る。これでどれだけ大きな声を上げても、両親や近所——それこそ、窓を挟んですぐにいる晶にも届くことはない。

自然と、口角が上がる。

晶はすべてを理解した上で、結乃を受け入れた。

調教の後遺症のこともわかっているし、それを理由に嫌ったりはしないだろう。それでも、できることならば晶にはいやらしい女とは思われなくなかった。

理由はそれだけ——そのはずだ。

「んっ、あ、うんっ♥」

束ねた指が、膣内の気持ちいい場所を刺激するよう往復する。

ぐちゅっ、と掻き出された蜜が白いシートを濡らす。結界がなければ両親や、起きていれば晶にも聞こえてしまったであろう嬌声も、もう我慢する必要はない。

指でできた肉棒の代用品を、おぼろげとなった夢の内容を追いかけるながら往復させる。

「あっ……はあんっ……ふあっ……」

ざらついた天井を指先が擦ると、甘酸っぱい感覚が背筋を走る。

クイツ、クイツと。ベッドから腰が浮いて、より深く、気持ちいい場所に当たるよう指が蠢く。

「んっ……ふあっ……ふうっ、んっ……」

ぬちゃっ、ぬちゃっ、と粘り気の強い水音が結乃の耳を犯す。しかしそれが羞恥の感情を呼び覚ますよりも早く、そして強く、快楽を求める衝動が結乃を突き動かす。

「はあ……はあっ……あ、うんっ——♥」

ビクンツ、と。結乃の身体がひときわ大きく痙攣し、絶頂に達したことを知らせる。

「んっ、ふうっ♥」

股間から甘美な快感が駆け上がり、結乃の意識を快楽^そだけで染め上げる。表情は蕩け、口の端から唾液が溢れる。普段の理知的な美貌が嘘のような、だらしない淫女の笑みだった。

「イクツ♥ イッちやううっ♥」

絶頂の瞬間を自白しながら、結乃の指先が敏感な箇所を苛烈に責め立てる。快感の細波に二度、三度と甘い絶頂を迎えながらも、その奥にある、巨大な絶頂に向けて自慰が続く。

浮かんだのは、屹立した肉棒の威容。

晶のそれよりもふたまわりは太く、長く、圧倒的に凶^{きつこちよやくやう}。悪^{あく}な怒張^み。視覚情報^たと嗅覚情報^{にお}が記憶として蘇り、結局味わうことのなかったその味覚情報^あと触覚情報^{かん}を想像させて——

「——様あ♥」

蕩けた嬌声が誰かの名前を叫び上げると同時に、結乃はひときわ強烈な絶頂に達した。

頭の中が真っ白に染まる。まっさらに漂白された空白に、ドロリとした何かが注がれる感覚。だがそれは決して不快ではない。

何も考えられない。考えたくない。今この瞬間は、巨大な絶頂の余韻に浸り続けたかった。

「はあ……はあ……♥ はあ……♥」

甘い、甘い吐息が、喉を抜けてゆく。

求めていた絶頂を迎えたことで、急激な睡魔が結乃を襲った。

それに抗おうとする意思は今の結乃にはない。

温水プールの水面に浮かび続けるような、心地良い浮遊感に包まれたまま、結乃の意識は再度眠りへと落ちていった。

● 五章

その日、結乃は晶とのデートのため、御珠駅前の繁華街へとやってきていた。

平和を取り戻し、大好きな人と、恋人として過ごす時間。

何の不満もあるはずがない満たされた時間のはずなのに、結乃はどこか物足りなさを感じている自分の卑しさが嫌だった。

そんな平穏を打ち破るように、結乃は幻魔の結界の気配を感じた。

同行しようとする晶を、結乃は頑なに拒絶した。もう二度と、ク

オルツのときのようなことは起きてほしくなかった。

最終的には不承不承ながらも、晶は結乃を送り出した。

その言葉が、信頼が、結乃にとっては一番の力の源だった。

現れた幻魔は強くはなかった。

クオルツという上位幻魔すら倒した結乃にとって、一蹴できるほどの、ごく普通の幻魔でしかなかった。

光剣によって幻魔を倒した結乃は、いつものように浄化をしようと手の中の光剣へと力を集中させる。

正確には、させたつもりだった。

しかし――

「えっ……？ なんぞ……」

浄化の光が生まれない。

結乃は、これまでも希晶石の力を理解して使っていたわけではなかった。その仕組みも、どのような技術体系によって動いているのかも結乃は知らない。テレビの仕組みを知らずとも、番組を見ることはできるように、道具の原理など知らなくても使うことはできる。自分が希晶石を扱って、それが誰かを守る力となるのなら、それで充分だった。今、この瞬間までは。

だが、無意識のうちに使えていた力だからこそ、使えなくなった今、それが何を理由とした不調であるのか判断できない。

希晶石に何らかの不具合が起きているのか、あるいは結乃自身に何かの問題があるのか、それすらもわからない。

普段ならば、倒した幻魔はすぐに浄化していた。

それゆえに、結乃は知らない。倒した幻魔をそのまま放置した場合、どうなるのかを。

「ぐ、が、あああああああつ！」

もはや声を出す箇所もないはずの幻晶から、獣の吠声にも似た音が生まれた。直後、幻晶から闇色の光が溢れ出し、異形の巨体を再生する。

「なっ……再生、したっ!？」

浄化の不調と未知の再生。二つの出来事が立て続けに起こり、その衝撃は結乃の思考に致命的な空白を生み出していた。

再生した異形の巨体が、結乃の肉感的な肢体をアスファルトへと押し倒す。

「く、あっ……！」

「ぐ、ひひっ……よくわからないけど、形勢逆転のようだね」

言いながら、幻魔は晶衣にいきり勃った肉槍を押し当てた。

今にも犯されようとしているのに、結乃が感じたのは恐怖ではなかった。

(すごい……おお、きい……)

口の中には大量の唾液が溜まっていた。

いつもよりも粘り気が強いそれは、呑み込もうとすればごくりと音を立てて喉に絡み、抜けていく。呑み込んでも呑み込んでも、次から次へと口内を満たしてゆく。

——欲しい。

お腹の奥から、そんな声が聞こえた——ような気がした。

一度その声に気付くと、もう無視することはできなかった。

喉をぬける吐息が、灼けそうなほどに熱い。

晶衣のクロッチには、結乃自身から溢れた蜜が淫らな染みを形作っていた。

閃き。

(そう、だ……そうだよ……♥)

手段はある。この状況を打開するための手段を、結乃は既に知っている。

通常の浄化が出来ないならば、封じれば良い。クォルツを封じたときと同じように。

(だけど、そのためには……)

この幻魔に犯されるしかない。

それもただ、されるがまま犯されるだけでは足りない。

相手を満足させる必要がある、どころではない。

人の身には収まらず、その肉体を、精神を、怪物へと変えてしまふほどの莫大な欲望を、すべて受け止め、封じ込める。そのためには浅ましく精を請い、淫れ、精魂尽き果てるまで搾り取らなければならぬ。

あの日——晶と本当の意味で結ばれたあの日から、結乃は毎日晶に抱かれている。

毎日のようではなく、一日の漏れもなく、文字通りの毎日。

晶はクォルツに犯された影響を引きずって、発情を繰り返してしまふ結乃のことを、求めに応じて抱いてくれる。しかし、体力と性欲旺盛な思春期の男子と言っても限度はある。

人外の快楽に触れてしまった結乃の身体に、普通のセックスはあまりにも普通すぎるのだ。もちろん、愛する人との交合は結乃の心を癒やし、狂おしいまでの淫欲を抑える楔となっはいるが、結乃が晶との交合で、性的に満たされたことは一度もなかった。

(もしか、したら……)

そう、もしかしたら、晶相手では満たされなかったものを満たしてくれるのではないか、という期待がまったくなかったのかといえれば、否定しきることはできない。

いつの間にか、口の中に唾液が溜まっていた。重く、粘ついた、水飴のような唾液が。

それを結乃は、ごくりと、喉を鳴らして呑み込んだ。そもそも、今の結乃に他の選択肢などない。

戦うのをやめると言って逃がしてくれる相手ではないし、仮に力を振り絞れば逃げられるのだとして、そうすればこの欲望の怪物は結乃ではない別の獲物を狙うだろう。

自分の貞操大事にその誰かを見捨てられるのか。

そんな寒々しい言い訳を、結乃は頭の中で繰り返す。きつと晶は許してくれる。

——コノヒトヲタスケルタメダモン。

だって晶は、クオルツに穢されて、その快楽に屈しそうになった自分でさえも受け入れてくれたのだから。

迷いは——融けた。

(演じなくちゃ……)

正義の使命など忘れて、快楽に屈した浅ましい牝を。

本当に屈したわけじゃない。

この幻魔を救うために、仕方なくするだけ。

「ねえ……して♥」

熱い。子宮から生じた熱によって加熱された吐息が、気道を焼きながら喉を抜けて出る。

「ん？ どうしたんだい？」

「犯して、ほしいの……♥」

恋人に甘えるような甘ったるい声。そうしようと思っていた以上

の媚び声に、結乃は満足する。きつとこれなら、この幻魔も騙せるだろう、と。

「ぐひひっ。なんだもう堕ちちゃったのかい。正義の味方とは言っても所詮はメスだね」

その反応に幻魔は結乃が快楽の虜へと堕ちたことを確信したようだった。

幻魔に疑念を与えないため、結乃は両手を幻魔の巨体にまわす。

「はい……♥ だってえ、このチンポ、気持ちよすぎるんですっ♥」

「そりゃあ嬉しいこと言ってくれるねえ。それじゃあ、いやらしくおねだりしてごらん？」

欲望そのものを音にしたような下卑た声が鼓膜を揺らす。

羞恥の感情に、頬が熱を持ち朱に染まるも、結乃に躊躇はなかった。

「ああ……♥ はい、いっ♥ わたしの、エスフェールおまんこお

♥ ぶっとい幻魔おチンポで、滅茶苦茶に犯して、くださいい♥」

考えるまでもなく、まるで本心から望んでいたかのような自然さでおねだりの言葉が喉を抜けていく。

ぎゅうと抱擁を強めると、勃起した乳頭が異形の巨体に擦れ、痺れるような官能電流が走る。結乃の身体は、既にその刺激だけで絶

頂寸前にまで高まっていた。

結乃の淫らなおねだりに、幻魔は異形の相貌を笑みの形に歪めた。直後、幻魔はその巨軀の体重すべてを己の肉根に乗せて突きだし

た。

「んひいひいっ♡」

一瞬にして結乃の膣奥を貫いた剛直は、それだけでは飽き足らず子宮口を押し潰しながら結乃の腹の奥を蹂躪し、結乃の視界に火花のような閃光を散らさせる。

「ッ!? ————ッ♡ ————ッ♡」

声にならない絶叫を上げながら、結乃は達していた。結乃の膣内を隙間無く埋めていた肉槍は、結乃の膣壁の痙攣に合わせて脈動し、結乃の子宮口を小突いて更なる快悦を与える。

結乃の全身は、陸に打ち上げられた魚のように跳ね回り、そのたびに乳房が激しく揺れて汗を撒き散らす。

——ドチュツッ! ブリュツッ! グチャツッ! ヌチヨツッ!

結乃の膣を犯す淫らな水音が響く。

それは結乃の愛液と、幻魔の先走り汁とが混ざり合い、泡立つ音。結乃は反射的に幻魔の巨体に抱きついていった。激しい挿挿を受け止める度に結乃の身体はその反動で激しく揺さぶられ、頭の中までぐらぐらと揺れ続ける。

(すごい、い……すごい、これえっ……♡)

結乃は、これまでに感じたことの無いほどの強烈な感覚に翻弄され続けていた。晶とはもちろん、クォルツとの交合とも異なる。脳天を直撃するような鋭い快楽に、結乃の思考はまともに機能していなかった。それでも結乃の肉体は、これまで経験したことが無いほどに強力な快楽を貪欲に求めていた。

——ずぶ、ずぶ、ずぶずぶんっ!

淫猥な抽送運動が繰り返されるたび、結乃の身体は快楽に震え、

溺れてゆく。

「は、あああっ♡ しゅごい、これえっ♡ こんな初めてえ♡」

結乃の身体は、幻魔との性交に完全に屈してしまっていた。理性は快楽に塗りつぶされ、正義の使命など欠片も残っていない。あるのはただ、快楽を求める本能のみ。

(ああ……♡ でも……もっと……もっと、ほしい……♡)

ただされるがままではない。自らも腰を振り、怪物の抽送を受け入れる。細く優美な指先が、異形の身体を、傷つけようとすることも、拒もうとするのでもなく、優しく、官能的に愛撫する。

ビクリと、異形の巨体が快楽に震えた。

——可愛い。

おおよそ、自分を犯す異形の怪物に対して抱くはずのない感想が生まれて、快楽に弾ける。

結乃はもう犯されているだけではなかった。

受動的に犯されるのではなく、能動的に犯す。

もし誰かがこの様子を見ていたならば、結乃が犯されているなどと思う者はいないだろう。それどころか、大半の者は結乃が異形の怪物を犯しているとすら思うかもしれない。

もちろん、幻魔もされるがままではない。どのような欲望を基としているのかはわからないが、少なくとも、自らが女性に弄ばれることを願っていたのではないのだろう。

乱暴だった抽送がさらに勢いを増す。

極太の、異形の肉棒が結乃の膣内^{ナカ}を往復するたび、腰と腰が打ちつけられる打撃音と、粘り気の強い本気汁が掻き混ぜられ掻き出さ



れる下品な水音とが重なった淫音が響き渡る。

普通の人間ならば、壊れてしまいそうなほどの激しい抽送も晶衣の生み出す力場に守られた結乃の身体は苦にしない。

骨が軋み、臓腑が圧迫されても、結乃の身体はそれを苦痛ではなく、官能として受け入れていた。

「んっ♥ ああっ♥ はあんっ♥」

結乃が責めれば、幻魔もまた負けじとその抽送行為を加速させる。

互いが互いを競い合う、アスリート同士の切磋琢磨のように、二匹の獣の爛れた情交は激しさを増していく。

結乃の膣が、異形の巨根に絡みつき、愛撫する。

さながら淫魔の如く、人を狂わす欲望の怪物を、精から根まで搾り尽くすために。

「——ッ！」

あまりにも強すぎる快楽に悶えるように、幻魔が吠える。

もはや封印浄化のために、というお題目は頭から吹き飛んでいた。

ただこの人外の——愛する人相手では到底得られない快楽を与えてくれる剛直をもっと強く、もっと激しく感じたい。そんな本能が結乃の身体を突き動かす。

大型単車並みの質量を持った巨体がアスファルトもたやすく砕く超常の剛力で叩きつけられる。そのたびに、押しだされた愛液が結乃の意識とともに弾ける。

「いひひっ！ いいぞっ！ いいぞエスフェールちゃあんっ！ お

じさんのお気に入り性奴隷にしてあげるからねえっ！」

——ぐちゃ、ぐちゃ、ぐちゃぐちゃぐちゃっ！

結乃の秘裂は太い肉棒で埋められ、肉棒は結乃の最深部を何度も突き上げる。結合部からは泡立ち白濁した本気汁が溢れ出し、アスファルトの上に飛び散っていた。

結乃の身体は幻魔の身体に押し付けられ、その大きな胸が潰れて形を変える。

その先端、晶衣ごしにもはつきりとその存在を主張するほど硬くなった突起は時折、幻魔の身体に擦れ、結乃はまた新たな快楽に悶え狂う。結乃の膣内は、幻魔の肉棒を締め付け、射精を促すために収縮を繰り返す。

結乃の膣内で暴れる肉棒が、一際大きく膨張した。

「く、おおおっ……出す、ぜえ……受け止めるおっ！」

幻魔は結乃の耳元でそう叫ぶと、今までよりも一層強く、深く、結乃の子宮口へと龟头をねじ込むようにして叩きつけた。

結乃の最奥で、幻魔が爆ぜた。

「あひっ♥ ああああああああああ——♥」

子宮口にめり込んだ肉棒の先端から、大量の精液が吐き出される。結乃の子宮は幻魔の巨根によって押し広げられ、子宮の中を満たしていく。

びゅるっ、るるるるるるるるるるうっ！

膣が鼓膜になってしまったかのように、脈打ち、ゼラチン質の欲望が流し込まれる音が聞こえてくる。それが錯覚なのか現実の感覚なのかもはやわからなかった。

その熱さと量に、結乃は背筋を仰げ反らせながら獣のような声を上げて果てる。

——ドクッ、ドクドクドクッ！

結乃の子宮に幻魔の精が注ぎ込まれ、その熱さが結乃の脳内を白濁で染め上げ、快樂一色に塗り替える。

——ビクビクッ！ 絶頂を迎えたばかりの結乃の膣が、幻魔の巨根をきゅつと締め付ける。

結乃の膣内の動きに合わせ、幻魔の肉棒が脈打ち、最後の残滓までも結乃の子宮に流し込もうとする。

このまま、この怪物に支配されてしまいたい。そんな欲求に染め上げられそうになったそのとき。

結乃の脳裏に浮かんだのは、晶の顔だった。穢れきった自分を、それでも愛していると言ってくれた最愛の恋人の顔。

「っ……！」

それが、快樂の虜となるうとしていた、ほとんどそうなりかけていた結乃の精神を、ギリギリの場所で踏みとどまらせ、正義の意思を振り絞らせた。

「希晶、石、よっ……！」

祈りと共に、結乃は希晶石に想いを込める。

ドクンッ、と。

結乃の下腹が、強く脈を打った。

(あ……あ……これ……な、に……知らない、知らないっ……知らない、けどおっ♥)

力が溢れてゆく。あまりに甘美な、エスフェールとして戦ってきた今まで、一度として感じたことのなかった感覚。

希晶石が光を放つ。だがそれは結乃がよく知る薄桃色の光輝とは

違っていた。

暗い、昏い——欲望を煮詰めたような、黒紫色の輝き。それが希晶石から、そして結乃の下腹に刻まれたまま消えない淫紋から噴出し、幻魔の身体に絡みつく。

「な、なんだっ!? なにをっ!? 吸い、上げられっ……なっ、止まらなっ、抜けないっ!?」

慌てて腰を引こうとする幻魔の身体を、結乃は絡めた脚を引きつけることで逃さない。

結乃の言葉と同時に、結乃から溢れる光の濁流が、幻魔の身体に染み込む。

直後、結乃に収まったままの幻魔の巨根が、ひとまわり、ふたまわり。限界を超えて膨張し、結乃への注精を加速させる。

もはや幻魔には思考力すらも残ってはいないようだった。結乃から生まれた光の触手が、幻魔の身体を操っているようですらあった。

「あ、が、あ、あああああああああっ！」

咆吼と呼ぶべき声をあげながら、幻魔が最奥のさらに奥へと捻じ込もうと腰を突きだしてくる。

「ああんっ♥ もっと……ほらあ、もっとおっ♥ あなたの、ドロッドロの欲望、私の子宮に、全部注いでえっ♥」

巨根の先端が子宮口に食い込む快感に、結乃は歓喜の声を上げる。ドクドクッ、ドクドクドクッ！

結乃の求めに応えるように、幻魔はすべてを注ぎ込んでゆく。

「あっ♥ あっ♥ ああああ——♥」
幻魔のすべてを受け止めた瞬間、結乃は背を仰け反らせて果てた。

白む視界の片隅で、結乃から伸びていた光の触手が、名残惜しむように結乃の中へと戻っていくのが見えた。

「ああ……これ……すご、いい……♡」

恍惚に身を任せたまま、数十秒が経った頃、ゆっくりと結乃の意識が浮上してゆく。

結乃の目の前には、幻魔の本体だったのであろう平凡な男の姿があった。結乃を満たしていた異形の巨根は、ただの人間のモノに戻り、萎んだ肉棒が、喪失感を伴いながら抜け落ちる。

「んっ……♡」

極太の肉槍に蓋をされていた膣口は閉じることを忘れてしまったかのようにぱっくりと開き、そこからどろどろと幻魔の精が零れ落ちる。

「あれ……この、人……」

人の姿を取り戻したその男を、結乃はどこかで見たことがある気がした。年齢は結乃の父親と同じか、少し上くらいだろうか。くたびれたサラリーマンといった印象の男だった。やや肥満気味で、分厚い瓶底眼鏡を掛けてこそいあるものの、それ以外に特徴と言えるような特徴のない、どこにでもいそうな平凡な男性だった。

眉を寄せ、記憶を探るが、記憶の中に男の顔はなかった。

「気のせい……だよね……」

はあ、と溜息を吐いて、結乃は立ち上がると、お腹が重かった。

封印のためとはいえ、大量の射精を受けたことで、結乃の妊娠初期の妊婦のように、うっすらと、しかし確かに膨らんでいた。

晶衣に包まれたその腹を、結乃は——優しく撫でた。

まるで、我が子を愛おしむ慈母のように。

ぬちゅ、にちゃあ。

牡と牝の体液に濡れた手指が、手の平が、優しく腹を撫でてゆく。下腹に浮かび上がったまま消えることのない淫猥な紋様が、歓喜するかのように、ぼんやりと光を放っていた。

妖しげな光は、まだ沈みきらない太陽の光に掻き消される。しかし、それは存在しないわけではない。ただ見えないだけなのだ。

「あはっ♡」

自然と、声が漏れる。

蕩けるように甘く、満ち足りた声が。

それは、充足感だった。

幻魔を浄化することができた。

誰かを守ることができた。

その事実に対する充足感に、決まっていた。

変身を解いた結乃の指を飾る大ぶりの真珠には、以前は存在しなかった澱みが生まれていた。その変調に、結乃はまだ気付かない。

*

幻魔を封印したあと、結乃は男の記憶を消去し、周囲の被害の修復を終えると、すぐに晶の元へと戻った。

晶は結乃を心配したが、結乃は晶に問題なく浄化できたと返し、何事もなかったかのようにデートを再開した。

何をするでもない。ただ一緒にいる。それだけで幸せだった。

店をまわり、学生としては少しだけ背伸びしたレストランで夕食を取って、そしていつものように肌を重ねた。

学生カップルらしい、平凡な、だけど得がたい幸せの揺籃の中で、結乃は満たされていた。

● 六章

気がつくのと、結乃がいたのは学園にあるプールの更衣室だった。

結乃の身体を包んでいるのは、着慣れた競泳用の水着。

結乃が着ている水着には、普段とは違う点もあった。水着のほとんどに存在する裏打ち用の布地がないのだ。そのせいで、クロッチ部分は結乃の割れ目に食い込んで、一本の筋を浮かび上がらせているし、伸縮性の布地に押し込められた豊乳の先端もぷっくりとその存在を主張している。

ああ、そうか、と。

結乃は茫洋とした意識の中で理解する。

(また……夢だ……いやらしい、夢……)

クォルツに犯されて以降、毎日のように見るようになった淫夢。

そうでなければこんな水着は着ないのだから。

抗おうとしても意味はない。今、淫夢を見ている結乃はただの視点でしかない。淫夢の中で結乃が何をするのか、見て、見ただけの結乃にはわからないし、干渉することもできない。それどころか、抗おうと思っていられるのは最初だけ。すぐに意識は淫夢の中の配役に呑み込まれてしまう。

「はあ……ん……♥」

着慣れた水着が、とてもいやらしい衣装のように思えて、結乃は頬を緩めた。

既にクロッチ部分、一本のスジがくつきりと浮かんだその部分を中心に、水着はその色を暗く染めている。

「おいおい、マジかよ。もしかしたら、と思っけてきたら本当にお前がいるとはなあ。とんだサプライズだ」

鼓膜に粘りつくような淫猥で下劣な声だった。それが教育者のものであるとは思えないくらいに。

でっぷりと前に突きだした、元とはいえスポーツマンらしからぬ肥満体。脂が出て艶を帯びた顔も含めて、お世辞にも女性からの好意を受けやすい容姿とは言いがたい。

「奥原田、先生……？」

いつの間にかそこにいたのは、結乃もよく知る人物。男子水泳部の顧問である奥原田だった。

容姿を差し引いても、その好色な視線や言動から、ほとんどの女生徒から嫌われている。

基本的に誰に対しても変わらず接する結乃であっても、露骨に態度に出しはしないものの、好きになれる相手ではなかった。

その、脂ぎった視線が、結乃を舐めまわす。

学年でも一、二を争う胸元の膨らみを、その先端でぷくりと自己主張する突起を、びたりと肌に張りつくことで浮かび上がる臍の凹凸を、むっちり肉がつきながらも、くびれるべき場所はくびれた男好きのする腹から腰、尻への曲線を、そしてくつきりと食い込ん

だ一本スジと、それを中心によだれを垂らすように広がっていく染みを。

「本当にエロい身体してやがるなあ……」

ビキニなどのように、異性へのアピールのための水着を否定するわけではないが、こと競泳用の水着の目的は速く泳ぐことだと結乃は思う。

タイムを十分の一秒、百分の一秒縮めるため、結乃も、そして水泳部の仲間たちも必死に努力を重ねてきた。

それゆえに、結乃はエスフェールの晶衣と同じくらい、あるいはそれ以上に水着姿にも誇りを持っている。

だからこそ、それを卑猥な目で見てくる男たちには強い抵抗があった。

だけど、結乃は知ってしまった。

気遣いなどという梱包材を廃した、剥き出しの欲望に蹂躪される快感を。

普段から奥原田はいやらしい視線を隠すつもりもなく女生徒たちに向けていた。皆がずっとそう思っていた。

違う。

剥き出しの欲望のように感じていたあの視線は、それでもめいっばい抑えたものだったのだ。

結乃がそれに気付いたときには、口内にはマグマのように煮立った唾液が溜まっていた。

「はあ……はあ……ん♥」

甘い疼きに押されて、吐息が漏れる。口の中に溜まっていた唾液

のマグマが口端から溢れ、糸を引いて水着に滴ってゆく。

湧き上がるべき感情は生まれなかった。

水着姿をいやらしい視線で舐め上げられて、嫌悪の感情があつて当然なのに、そうでなければおかしいのに、結乃の奥から湧き上がったのは、興奮だった。

「んっ……♥」

熱い息が喉を抜ける。

身体の中を荒れ狂う熱に身をよじると、敏感な箇所が水着に擦れて甘い官能が広がってゆく。

その反応に興奮したのか、奥原田のでっぷりと突きだした腹の下、くたびれたジャージのズボンは今にも悲鳴を上げんばかりに張り詰めていた。

(……先生、勃起してる……私の身体で……私の、水着姿で……)

嗅ぎ慣れた塩素の匂いに混ざって、酸っぱい匂いが鼻腔を抜ける。

(ああ……)

知っている。

これは、牡の匂いだ。

そう頭が結論を出すより早く、子宮に火が灯っていた。

触れてもいないのに、クロッチに浮かんだ染みがどんどん広がっていく。

「俺に手を出させてハメるための罠、なんて顔じゃあないな」

奥原田の瞳に映り込む結乃の顔は、取り繕う余地もない。牡に餓えきった牝の顔だった。

「最近の俺はツイてるぜ。アイツだけじゃなく、まさかお前とまで

やれるとは思ってなかったからな」

くたびれたジョージのゴムを伸ばしながら、奥原田はズボンを下ろしていく。布地が張り詰めるほど膨らんだブリーフは、元々は白だったのだろうが、使い込まれたせいも黄ばみを帯びて、お世辞にも清潔には見えない。張り詰めたその頂点には、先走りが染み込んでいた。ズボンの中に閉じ込められていた濃密な牡の臭気が一気に広がる。吸い込んだ牡臭は麻薬のように結乃の理性を薄めていく。

奥原田の芋虫のような指が結乃を抱き寄せる。脚に力が入らずに、結乃は奥原田の巨体に寄りかかるかたちとなる。水着越しに、尻の割れ目に硬い感触と、脈動を感じる。

（ああ……先生のちんぽ……当たって……水着越しなのに、逞しいのわかる……♥）

結乃の内心を見透かすように、奥原田は腰を前へと突きだしてくる。ただでさえはつきりと伝わっていたその存在感がより鮮明に感じられて、結乃はごくりと生唾を飲んだ。

「こんなエロい牝オンナを欲求不満にさせておこなんて、播磨はインポなのか？」

肉棒の感触に意識を吸われつつも、晶への罵倒は結乃の心にささくれを生んだ。弱々しく首を横に振って、奥原田の言葉を否定する。「あつくんは……頑張っ、て、く、れ、て、ま、す……私オレが毎日抱いてもらっ、て、る、せ、ひ、ゃ、う、ん、っ♥」

言葉の途中で、奥原田の太い指先が、結乃の肌と、肌にびたりと張りつく水着との間に入ってくる。肌を撫でる手つきは、晶に同じことをされたときとは比べものにならないほどいやらしい。

「いつもいつもこんなデカイチチぶら下げて泳ぎやがって、水泳舐めてんのかあ？」

ただでさえ窮屈な水着の中に、奥原田の芋虫のような指が生えた手ごと挿入はってくる。ベタツとした手汗を帯びたてのひらが、水着に抑えつけられて豊乳に押しつけられる。ぐにゅり、ぐにゅりと、狭い水着の内側で、芋虫のような太い指が蠢く。結乃に快感を与えようとする。

「はあ、ああっ♥ 先、生いっ♥」

それなのに結乃は、奥原田の手をはね除けることができなかつた。狭い隙間を押し抜けながら、奥原田の右手が結乃の豊満な乳房を包み込む。汗ばんだ手のひらで硬く勃起した乳頭が転がされると、ビリビリと官能の電流が込み上げてくる。

「私が淫乱すぎるから、だろう？ 言い直せ」

甘い官能を豊乳から流しながら、奥原田が耳元に囁いた。

晶を非難する言葉は受け入れられずとも、自分を貶める言葉となると抵抗は小さかつた。そのわずかな抵抗も、芋虫のような指を乳房に食い込まされると、泡のように儂く弾けた。

「は、い……♥ んあっ♥ 私オレが、あんっ♥ 欲求不満、なのはあ……あつくんが、悪いんじゃないやあうっ♥ なくてえ♥ 私オレが、淫乱すぎるから、ですう♥」

よく言えたな、とでも言う代わりに、太い指が胸に食い込む。

ただただいやらしいだけのはずなのに、その行為に結乃は牡オトコらしさを感じた。きゅん、きゅんと子宮が疼く。脂ぎった奥原田の肥満体に、身体は自然と押しつけられた。水着に、奥原田の匂いが染

み込んでくるのがわかる。晶とは違う、酸味の強い汗の匂い。尻に当たる硬いモノが、さらに膨張したのが伝わってくる。

じわあ、と染み出したいやらしい蜜が、水着では吸いきれなくなつて太ももを伝つていった。

(すごい……これが、男の、人……勝てないっ♥ こんなのに勝てるわけないっ♥ 屈服するしかないって、思っちゃっ♥)

それは嘘だ。

確かに筋力だけなら、結乃には奥原田をはね除ける力などない。しかし結乃には希晶石の力がある。その気になれば奥原田から逃れることは簡単だった。

それでも、勝てないという確信があった。牝の本能が、この牡には勝てないと結論を出してしまっているのだ。

「こりゃあ完全にできあがってるなあ」

下卑た笑みを浮かべながら、奥原田は結乃の水着から手を引き抜いた。抵抗してはいけなくても言いたげに力の抜けた身体が、そのまま床にへたり込む。

ちようど顔の高さに、膨らんだ奥原田の牡があった。

「それで……彼氏じゃ満足できない淫乱は、どうしたいんだ？」

黄ばんだブリーフの頂点をチラつかせながら、奥原田が問いかけてくる。

微かに残った理性が、淫夢の中の自分がこれからしようとしていくことを否定する。

「わた、し……」

——どうした？

声が、聞こえた。

腹の底、子宮から生まれて、頭の中に直接響く声が。

——これは夢。そうだろう？

——誰に迷惑がかかるわけでもない。

声が、結乃の理性の枷をひとつ、またひとつと解いてゆく。

以前の結乃であれば、そんな誘惑の言葉、簡単に断ち切れたことだろう。しかし、迷う。

——恋人に対する義理立てか？ そんなものいらないだろう。

——男というものは恋人がいようと、別の女を思い描いて自慰をこくような生き物だ。

畳みかけるように、頭の中に声が響く。

晶の愛を信じていないわけではない。

人外の怪物に犯され、心まで捧げようとした自分すらも受け入れてくれた晶の愛を、結乃は誰よりも信じている。

しかし、不意にセクシーな美女へと目をとられることがあるのも知っている。

結乃はそれを裏切りだと思ったことはない。嫉妬心こそ完全に消すことはできないし、恋人になってからはそんな仕草を注意するようになったものの、男の子であれば、そのくらいは仕方ないことであるとかわかってる。

だからこそ、腹の底から響く、声が染み込む。

晶がそうすることを裏切りと呼ばないのなら、夢の中で愉しむくらいのことは裏切りなどとは呼びはしないだろう、と。

——むしろ、責められるべきは晶だ。

——恋人という立場でありながら、結乃おまえを満たすことができないのだからな。

晶を裏切れることは結乃にはできない。

だがこれは、淫夢ユメ。

誰かに迷惑をかけるわけじゃない。

晶を裏切る行為じゃない。

そもそも拒否する思考ホーシをしたところで、どうせ何も変わらない。

腹の底から響く声が告げた言葉を、結乃は鸚鵡返しではなく、自分の理として反芻する。

何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も。

頭の中で問いかけを繰り返し、否定の言葉が尽きて、結乃が答えを導き出すまで、奥原田はまるで生徒を待つ教師のように、じっと待っていた。

口の端から垂れ落ちた唾液が長い銀の糸を引いて、切れた。

唾液の糸とともに、結乃の理性も途切れた。

かろうじて自分を抑えていた晶の幻像が霧散して、意識が目の前の牡だけを捉える。今この瞬間、結乃の意識には自分と奥原田、たった二人の登場人物しかいなかった。

——先生の、おちんぼ……欲しい、です♥

奥原田は窮屈だったと言わんばかりに、ブリーフのゴムを伸ばしながら、中に閉じ込められていたモノを取りだした。ジャージを脱いだときよりも、さらに濃密な牡の匂いが周囲に広がる。

露わになったのは巨大な牡の象徴だった。

人間のそれよりも、幻魔のモノの方が近い、異形めいた巨根。晶はもちろん、これまでに夢の中で見てきたどんな人間の肉棒よりも太く、長く、グロテスクで、なにより、魅力的な肉棒チンポだった。

「どうすればいいか、わかるな？」

奥原田の問いに、結乃は言葉ではなく行動で答えた。

小振りな口を精一杯大きく広げると、ある種の食虫花の如く上唇と下唇の間を唾液が糸を引く。目の前に突きだされただけで熱感の伝わってくるそれを、

「ああ、むっ♥」

口内へと招き入れた。

うっすらとしたアンモニア臭と、その何十倍もの青臭さが口の中に広がる。その匂いを、その牡の強さを感じたくて、結乃は大きく深呼吸する。当然のように取り込まれた空気が、口内の臭気と混じり合って、何倍も強く嗅覚に作用する。

それだけで、目の前がチカチカと瞬いた。

プシュウツ、と。

水着の下で、霧吹きでも吹いたような音がした。

意識が揺らめき、数秒経って、ようやく結乃は自分が浅い絶頂を迎えたことに気付いた。

「チンポ臭いでイッたやつははじめてだ」

奥原田は愉快そうに笑うと、

「播磨のヤツのとどっちがデカイ？」

耳に貼りつくコールドールのような声音でそう聞いてきた。

考えるまでもなかった。

喉を抜けた懇願の言葉は、結乃の口の堰を融かしていた。普段であれば決して口にしないはずの言葉を続けさせる。

「あつふんのひより、じえんじえんおつきひ、れしゅ……♡」

うっとりとして、巨大な逸物を頬張ったまま答えた結乃は、そのまま舌を巨根に絡ませる。涎はいくらでも湧いてきた。鈴口から溢れてくる先走りの、晶よりも濃密な味を、匂いを、堪能しながら、口の中で唾液と混ぜる。どこが男性にとって気持ちいいのかは御主人様に刻み込まれていた。考えるまでもなく、舌が這い、頬が吸いついて巨根の中の敏感な部分を責め立て、味わう。

巨大な体積に口内を蹂躪される感覚は、晶相手には得られない、強い牡に支配される悦びだった。

(美味、しい……♡)

その濃厚な牡の味がもっと味わいたくて、結乃の舌の動きはさらに激しくなる。

じゅるっ、ちゅるっ♡

下品な水音を響かせて吸い上げると、奥原田はわずかに身体を震わせて反応した。

「へへっ、こりゃあ堪らんな」

奥原田の両手が結乃の頭を掴み、そのまま前後に揺さぶってくる。

「むぐうう!? ふごおおおっ!」

突然のことに結乃は驚きの声を上げるが、奥原田は気にもとめずに腰を動かしはじめ。剛直が引き抜かれると、結乃の口腔を牡の芳香が満たす。再び奥まで突き入れられたときには、結乃の舌が根

元から先端まで絡みつき、舐^{なぶ}ってゆく。結乃は口全体で奥原田の陰茎を愛撫していく。

「お前みたいな優等生がこんな淫乱だとはな! 喉を乱暴に犯されて、なんて顔してやがる」

呼吸も満足に行えず、脳に酸素が行き渡らない。酸欠で薄れゆく思考の中、それでも結乃の瞳は快楽の色に染まっていた。息を荒くした奥原田は、乱暴極まりない抽送を繰り返す。

ずぶっ、ぬぶっ、ちゅるっ!

粘っこい音を立てて出入りする長大な肉棒が、結乃の喉奥を犯してゆく。そのたびに結乃の口の端から泡立った唾液が漏れ、床に滴っては小さな溜まりを作る。

「ぐひひっ! そろそろ射精^だすぞ。しっかり飲めよ」

奥原田の言葉に、結乃はじゅぶるるるっ、と下品な吸引音を響かせながら、目だけで頷いた。

どくん、と。奥原田の巨根が脈動した直後、結乃の喉の一番深いところに、熱い粘液が叩きつけられる。

びゅっ、びゅるるるるううっ!

結乃はそれに逆らわず、喉を鳴らして嚥下する。どろりと粘度の高い精液は、結乃の口内を、喉を、犯すようにゆっくりと食道を下ってゆく。

(ああ……これ……すごい……♡)

頭の中が、すべて奥原田の下品な欲望に染められる錯覚。

晶以外の男性のものを受け入れた罪悪感と背徳感は、結乃の理性を取り戻させるどころか、興奮を煽るだけだった。晶のものとは違

う、濃厚な牡の味に、結乃は酔いしれる。

「ふう……射精した射精した……すげえ吸いつきだったぜ。淫魔とヤツてるみてえだ」

すべてを注ぎ終えると、奥原田は結乃の口内から肉棒を引き抜いた。

酸素を求めて、あるいは喉の奥から漂ってくるその牡の臭気をたっぷり取り込もうとして、結乃は大きく息を吸う。鼻の奥にゼラチンめいた精塊が触れてツンと痛みが走るのも気にせず、その芳香を堪能する。鼻腔を抜ける牡の香りが、結乃の頭を痺れさせた。

「はあ……はあ……ああ……んっ……♡」

「阿古屋あ」

奥原田は崩れ落ちた結乃の肩を掴んで引き起こすと、その顎を指先で持ち上げた。奥原田が何を求めているのかはすぐにわかった。

結乃は奥原田に言われる前に、その白く汚れた唇を開いて見せる。舌の上では、ゼラチンのように濃密な精塊が、糸を引いていた。結乃の顔に、奥原田の手が伸びてくる。頬に添えられた手の平に促され、結乃は口を閉じて、精液を飲み込んだ。

「……ごきゅっ、ごくっ♡」

あえて下品な音を立てながら、結乃は精塊を嚙下する。その音が聞こえたのだろう。奥原田は唇の端を吊り上げて笑みを浮かべた。

「良い飲みっぷりじゃねえか。ザーメンの味は播磨とどっちがい？」

「先生のお、ぷりっぷりの濃厚ザーメンの方が……♡ 美味しい、です……♡」

精臭しかしい吐息と共に、結乃はうっとりときどき答える。

胃袋に収まらないほど射精したばかりだというのに、その威容は収まるどころか、さらに雄々しく猛っていた。結乃はその先端、龟头部分に軽くキスをする。

愛おしそうに、何度も。

舌で丁寧に掃除をして、尿道をくすぐり、竿の根本にまで舌を伸ばす。狸の置物の戯画化された玉袋すら想像させる睾丸はまだまだ重く、牝を屈服させるための牡種を蓄えていた。

先生の欲望は、すごく——美味しい。

唐突に、結乃の脳裏にそんな想いが浮かんだ。

結乃の華奢な手では包み込むことの出来ない剛直が、ビクンと跳ねた。それを見て、結乃は目を細める。

「ねえ……先生……まだ、できますよね……？」

結乃は甘えるような声で奥原田を見上げた。下卑た獣欲に緩んだ口端から、唾液が垂れる。

「当たり前だろう。へにゃちゃん野郎と一緒にするな。お前とヤれるんだ。そこに手をつけて尻を向ける」

「はい……♡ せんせえ……♡」

結乃は言われた通りに、四つん這いになって尻を向ける。

「ぐひひっ。乳もすごいが、尻もすげえなこりゃ」
結乃の豊満に育った尻たぶに、奥原田の芋虫のような指が食い込む。その感触を堪能するようにぐにゅにゅと尻たぶが変形させられ、蕩けるような法悦が駆け上がってくる。

「んはあん♡」

給水の限界を越えた水着が、泉から溢れ出す淫らな蜜を太ももへと滴らせてゆく。背後から覆い被さるように、奥原田が密着してきた。

水着越しでもはっきりと分かる。男らしい胸板の感触。奥原田の吐息が、鼓動が、何よりも、太ももの間に挿入された硬い牡が伝わってくる。

「なあ、阿古屋。これでも俺は教育者だ。もしお前が、やっぱり嫌だ、なあんで思うなら、俺はお前の意思を尊重する」

不意に、低く、粘つく声が、耳元で囁かれる。奥原田にここでやめるつもりなど微塵もないのは明らかだった。あえてそう言ったのは、結乃に選ばせるためだろう。

「で……どうする？ なにを、どこに、ほしい？ 簡単な言葉じゃなく、しっかりと、わかりやすく言うんだぞ？」

まるで教育者のような言葉に、結乃もすっかり火照った頬を緩ませる。背徳感に興奮のためのスパイス以上の意味を持たなかった。

「先生の、おチンポ……♥ あっくんのよりぶつとい、絶倫チンポお♥ 私の、優等生ぶった淫乱おまんこに、ください……♥」

答えながら、結乃は水着のクロッチ部分、広い染みの中心である浮かび上がったスジのかたちをなぞさせるように、肉棒の先端に擦りつける。ズル剥けの先端から滲んだ先走りが、既にある染みに混ぜる。

「まさか、マジでお前とヤれる日が来るとはなあ。お前を播磨から寝取る妄想で何度又いたことか。くひひっ。夢みたいだぜ」

奥原田は嬉しそうな笑いを漏らすと、結乃の水着のクロッチを除

け、肉棒を一気に突き入れた。

——ずぶうううううううっ！

「んひひひっ♥ キたあっ♥ 先生のちんぽきたのおっ♥」

ぬるついた粘膜同士が絡み合う淫靡な水音と共に、結乃は歓喜の悲鳴を上げた。

幻魔との交合のときにも得られた、支配の法悦に目の前が白む。待ち焦がれていたモノをようやく受け入れた結乃の膣内は、ぎゅっと締まって肉棒を締め上げる。

「なんだ、挿れただけでイっちゃまったのか？」

「らってえ♥ せんせえのチンポ、よすぎるんですう♥」

結乃は甘えた声で媚びながら、腰を前後に揺すって快楽を貪る。

「ぐへっ。俺のはそんなにイイか？ 播磨の野郎のモノと比べて、どっちがイイ？」

——これは、夢だ。

結乃の理性に言い聞かせるように、再び声が聞こえた。

その声に、結乃は心の中で頷きを返す。

夢の中で自分を偽る必要なんてない。

そしてなにより、偽らざる本音を口にした方が、気持ちよくなれる。そう思った。

だから、答える。

「先生の、デッカいオチンポの方が、あっくんのより、イイ♥ 気持ちイイですうっ♥」

結乃がしたのは特別なことでもなんでもない。

ただ、認めただけだ。



それまで、認めてはいけなかつたと思つてた。

これ以上感じてはいけなかつた。

晶以上に愛してはいけなかつた。

無意識のうちに掛けていたリミッターが外れて――

快感が、一瞬にして何倍にも、何十倍にも膨れ上がった。

膣肉を押し抜けてくる巨根の感覚が、その太さも、長さも、硬さ

も、熱さもはるかに鮮明になる。愛おしくて愛おしくて堪らなくて、

膣肉で抱き締める。

「すご、いのおっ♥ せん、せのっ♥ オチンポっ♥」

「阿古屋のマンコッ、チンポに絡みついで、きやがるっ！ すげえ、

名器だっ！」

奥原田は結乃の尻たぶを驚掴みにして、その柔らかさを堪能しな

がら抽送をはじめめる。

結乃の秘肉は太い肉棒を離したくないとばかりにしゃぶりつき、

それでも足りないというように肉棒を扱いてゆく。

肉穴が奥原田の剛直の形に押し広げられる。その圧倒的な質量に、

結乃は溺れるような快感を覚えていた。

もっと犯して欲しい。滅茶苦茶にしてほしい。

結乃の思考はただそれだけに支配され、尻を振る動きも激しさを

増してゆく。

「あひいっ♥ しゅごいのお♥ おっきいチンポ、ゴリゴリきて

りゆううううっ♥」

奥原田にはクオルツほどの技巧があるわけではない。

相手のことなど一切気遣わない。自分の欲望を満たすための
自慰行為。

極太の肉棒が突き込まれるたび、その激んだ欲望が叩き込まれる。

一度のピストンごとに、晶相手では、精魂を注ぎ込むような最後

の瞬間にも届かない牝の法悦が全身を襲う。

これまで存在しなかつた好感度が、送り込まれる快楽に比例して

上がっていく。

「恋人を裏切つてする浮気セックスの味はどうだっ!？」

「あ、ああっ♥ 浮気セックス、しゅご、いっ♥ 気持ち、よすぎ

るうっ♥ すきっ♥ これすきいっ♥」

一度のピストンごとに、晶相手では、精魂を注ぎ込むような最後

の瞬間にも届かない牝の法悦が全身を襲う。

太く長いカリ首の段差に膣壁を引っ掻かれれば、脳天まで突き抜

ける快感に悶え狂いそうになる。

これまで存在しなかつた好感度が、送り込まれる快楽に比例して

上がっていく。

「上玉揃いの女子部の牝どもの中でも、お前はとびきりだったか

らな。そのエロい身体……入学当初から、ずっと目をつけてたん

だぞ」

欲望の言葉に、結乃は牝犬のように舌を出して、喘いだ。口の端

から垂れた唾液が、床を汚す。奥原田はそんな結乃の顎を掴むと、

無理矢理振り向かせ、唇を奪った。舌を絡ませてくる。

「んむうっ♥」

嫌悪感はなかつた。むしろ、積極的に舌を差し出して、結乃の方

から絡めていく。

互いの舌を舐め合い、唾液を交換しあう濃厚なキスを交わしながら、結乃は子宮の奥まで響く強烈な一撃を受ける。

唇が、淫猥な唾液の糸を引いて離れる。

「阿古屋っ！ どこに欲しいっ!？」

問いかげに、もう結乃は悩まなかった。

「膣内^{ナカ}にっ♥ 先生の濃厚中年ザーメン、私の膣内^{ナカ}に、子宮^{オウ}にくださいいっ♥」

理性^{アタマ}を介さず、本能^{カラダ}が、求めたとおりの答えを叫ぶ。

——どぢゅんっ！

結乃の膣奥に、龟头がぶち当たる。瞬間、結乃の視界が真っ白に染まった。絶頂の衝撃に、背中が仰け反る。

同時に、巨根が跳ね上がり、熱い奔流が結乃の中に注がれる。

——どぶっ、どびゆるるるるるっ！

奥原田は結乃の尻を鷲掴みにすると、腰を密着させて、精液を吐き出し続ける。大量の精子が結乃の胎内を逆流し、結合部から溢れ出す。

奥原田は一滴残らず結乃の胎に注ぎ込もうと、ぐりぐりと腰を押し付け、最後まで絞り出す。その間も、結乃は身体を痙攣させ、連続したアクメを味わっていた。奥原田が満足気に肉棒を引き抜くと、栓を失った結乃の淫裂から、どろりと粘っこい液体が溢れ出す。

「あへえ……♥」

あまりの快感に、身体に力が入らずに、結乃は床に力なくへたり込んだ。

「最高だったぜ。阿古屋……いや、結乃お」

「あ……♥」

嫌っていたはずの奥原田に名前と呼ばれて、その欲望で満たされた子宮がきゅん、と高鳴った。

「これからお前は俺のセフレだ。花岡ともどもたあっぷりと指導してやるからなあ」

晶のよりもゴツゴツとした、男らしい手が結乃の頭を撫でる。所有権を主張するようなその行為に、結乃は満たされるのを感じた。

「はい……奥原田先生♥」

結乃はうつとりと目を細めて、答える。その表情は、淫らに蕩けたものだった。

「ねえ……先生♥」

「どうした？ 安心しろ。フニヤチン野郎とは違うからなあ。お前みたいなエロガキが相手なら、十発は余裕だぞ？」

奥原田は二度の大量射精が嘘のように屹立する肉槍を結乃に見せつけてくる。その絶倫さに結乃はくすくす、と微笑んで、

「もっと気持ちよくなれる方法、試してみませんか？」

結乃の手の平の上には、いつの間にか野球ボールよりひとまわりほど小さな物体があった。ドクン、ドクンと、それ自体が生きているかのように脈打つそれは、邪悪な力を放っていた。

どこかから取りだしたわけではない。少なくとも、夢の中の自分と同じ感覚を感じている結乃自身にも、どこから取りだしたのかわからなかった。

だが夢に整合性があるとは限らない。結乃はそう自分を納得させ

て、うちから生まれる欲求に従う。

ふふ、と。結乃は微笑んで、それを怒張したままの巨根の鈴口に押し当てる。

もちろん、奥原田がいくら巨根といえど、野球ボール小のそれが鈴口から入っていくはずもない。それなのに、結乃が軽く押し当てただけで、それは奥原田の内側へと吸い込まれるように消えていった。

「お、ご……おあ、あ、ぐ、る、るうううう」

奥原田の口から、獣の唸り声に似た声が漏れた。猛毒に苦しむ猛獣のように、奥原田は自分自身の胸元を掻きむしる。だがそれも、ほんの数秒のこと。

ドクンツと。

射精したばかりだというのに、まるで衰える様子のない剛直が脈を打ったかと思うと、変化ははじまった。

蚯蚓ミミズのような血管がふたまわりは膨らんだ。風船に空気を入れるように、肉竿そのものも膨張してゆく。

元々の面影を残しながら、より太く、より長く、より凶悪へと変形したそれは、もはや子孫を残すための器官でも、男女が愛を交わし合うための器官でもなく、もっと単純な、メスの理性を削り下ろすための凶器でしかなかった。

「はあ……はあ……くくく……すげえな、コイツあ」

荒くなった息を落ち着けて、奥原田は生まれ変わった凶器に手を添える。

て、結乃の目の前へと突きだした。

「ああ……先生のチンポ、すっごい……♥」

うっとりとした、蕩けたような声を吐き出しながら、結乃は異形の凶器に頬を触れさせる。奥原田から沁みだしたものと結乃自身から湧き出したものが混ざり合い、ヌラヌラと輝く淫液を潤滑剤に、結乃は異形の凶器に頬擦りをしてその威容を確かめる。大きさだけではない。硬さも、その内側に蓄えた淫らな熱も、先ほどまでとは——たかが人間だった頃とは、比べものにもならなかった。いつまでも触れていた肉の凶器から顔を離すと、頬にべたりとついた淫液を、結乃は指で掬って口に運んだ。

疼く。

つい先ほど、あれだけの量を注ぎ込まれたばかりの子宮が、目の前の、極上の牡を求めてやまない。

「せんせえ♥」

両手を広げ、目の前の獣を迎え入れる姿勢をとると、獣欲に支配された牡が、その巨体で結乃に覆い被さる。

夜明けは遠く、淫夢ユメの終わりはまだしばらく——きそうになかった。

あとがき

——地の文が多すぎる。

どうもADUです。

まずは本書を手にとっていただきありがとうございます。

前回の「聖晶希石エスフェール」の続きにはなっていますが、今回の本だけでも問題ないかと思えます。

書きたかったものがようやく書けました。

結乃——エスフェールの痴態を。

前作については半分がゲスト部分で本編全然話がないじゃんと言われたり言われてなかったりしますが、今回は全編本編です。それが普通ですが。

挿入シーンが短く、竿役みんな早漏なのかと思った方もいるかもしれませんが、単純に限られたページ数で、描きたかったのがそこではないということです。

当初は晶とのラブラブえっちシーンもちゃんと書くつもりだったんですが、こちらもページの都合上割愛。あとにより、需要も薄かったのです。主に自分に対して。大事なのはどう愛し合ったかではなく、二人が愛し合ったという事実なのでそれがわかれば充分なのです。

ページの制約上、尺を削ったシーンだらけなので、全部出し終わったらページの制約を気にせず描写を追加した総集編を出すかもしれません。

変身ヒロインモノでもなんでも、油断をすると怪物相手ではなく、人間相手にしてしまいがちな私ですが、今回もその傾向、出てますね。触手や怪物姦ももちろん好きなんですけど、理解できず、意思の疎通もできない怪物に犯されるよりも、人の知性を使った下劣な責めの方が好きなんですよね。じゃあなんで変身ヒロインを書くのと聞かれたら、そりゃあ堕ちコスが映えるからです。

ああそうそう。

エスフェールという名前が希望を意味する「Espoir」と宝玉を意味する「Sphere」を組み合わせた造語なので、エスフェールについての用語はフランス語で統一しています。

今作のサブタイトル「Noyau insérés」もフランス語。

真珠養殖における「核入れ」という行程をイメージしてつけましたが、フランス語として正しいのかはちょっとわかりません。

今回入稿締切に余裕あるからってあとがきも長いですねこいつ。

今回も素晴らしい挿絵を描いてくださった左藤空気さん、本当にありがとうございました。

次が最終巻です。

奥付

聖晶希石エスフェール Noyaux insérés

発行日

令和4年8月14日

発行者

ADU (サークル：ニワカカミキリヤモドキ)

連絡先

Mail: adu_64@yahoo.co.jp Twitter: ADU_64

印刷所

株式会社ポプルス

無断転載厳禁。

Reproduction without permission is prohibited.

この本の内容をWebサイト等に無断転載した場合、

「1ページにつき10,000円」および「1ページビューにつき500円」

の支払いを行う契約に同意したものと見なし、対応させていただきます。

聖日晶希石

エスフェール

✦ Holy Crystal ✦
Esphere

Noyaux
inséré



presented by
ニワカカミキリヤモドキ